

修士論文

ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計

-日中間ビジネスをテーマとした協同学習-

Design of PBL Class using blended learning

- Collaborative learning based on Japanese and Chinese business-

社会文化科学研究科 博士前期課程 教授システム学専攻

2022 年度入学

227G8807

濱崎 あゆみ

指導：喜多 敏博 先生

合田 美子 先生

2023 年 12 月

目次

1. はじめに.....	6
1.1 研究の背景.....	6
1.2 先行研究.....	8
1.3 研究の目的.....	9
2. 経験学習理論に基づく PBL 型授業.....	9
2.1 PBL 型授業とは.....	9
2.2 協同学習とは.....	11
3. ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計と開発.....	13
3.1 本授業の位置付け.....	13
3.2 現状分析.....	22
3.3 ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計と開発.....	27
3.3.1 ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の全体像.....	27
3.3.2 LMS (Moodle) 教材の設計・開発.....	34
4. PBL 型授業の評価と改善.....	38
4.1 実務家によるエキスパートレビュー.....	38
4.1.1 実務家によるエキスパートレビューによる結果.....	38
4.1.2 実務家によるエキスパートレビューからの改善点.....	45
4.2 ID 専門家レビューによるエキスパートレビュー.....	47
4.2.1 ID 専門家レビューによる結果.....	47
4.2.2 ID 専門家レビューからの改善点.....	51
5. 形成的評価.....	54
5.1 小集団評価の実施.....	54
5.2 調査方法.....	56
5.3 実施結果.....	56
5.3.1 学生の事前テスト・事後テスト結果.....	56
5.3.2 学生の実施後アンケート結果.....	58
5.3.3 学生の「協同学業認識尺度」の事前・事後調査結果.....	70
5.3.4 企業の実施後アンケート結果.....	70
6. 研究の成果と今後の課題.....	73

6.1 研究の成果.....	73
6.2 今後の課題.....	74
参考資料.....	75
参考文献.....	97
謝辞.....	99

要旨(日本語)

近年、グローバル化が進展する中で、異なる文化背景や価値観、国籍を持つ者同士による共同作業の中でよりよい成果を生み出すことができるグローバル人材育成に向けた取り組みが重要となる。

しかしながら、異なる文化背景を持つもの同士がグループ構成されたとしても、双方にとって「見せかけの学習グループ」になってしまい、「異文化理解」を実現することが難しく、チームで協力し、課題達成に向けチーム全員で働きかける中で仲間意識の醸成や達成感を味わいづらいという課題がある。

そこで、本研究では、日中間ビジネスをテーマとした協同学習を題材にした産学連携による PBL 型授業の設計・開発を行う。学習者同士が、オフラインの対面授業とオンラインの Moodle の中で、異なる文化背景を持つ者同士がディスカッションを通して、学び合えるコミュニケーションの場の中で課題解決をする、e ラーニングと対面授業を組み合わせたブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計・開発を行い、学修効果の有用性を検証した。

その結果、学習目標の到達度を測定するために、事前テスト・事後テストによる平均点を比較したところ、事前テストより事後テストの得点の方が有意に高く、学生たちが本授業を通して達成感を味わえたという結果を得ることができた。また、協同作業における認識について「共同作業認識尺度」を用いて定量的測定を行ったところ、「個人志向」因子と「互惠懸念」因子が授業の実施前と実施後で比較したところ、数値が低下し、「協同効用」因子に上昇がみられた。

今回の研究では、異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫をしながらディスカッションを進めていくことが、有益であり、協同学習においてみんな違う価値観のなかで課題解決をしていくための経験から得る深い学び学びを強く望んでいることが明らかになった。

要旨(英語) Abstract

In recent years, globalization has gained importance in developing a global human resource that can produce better outcomes in collaborative work across diverse cultural backgrounds, values, and nationalities.

However, even when groups from different cultural backgrounds are formed, it remains challenging to realize cross-cultural learning group. Realizing intercultural understanding and cooperation can also be difficult. There is an obstacle: the group members may struggle to appreciate each other's contributions and sense of accomplishment while collectively working toward the problem-solving goals.

In this study, our group focuses on designing and developing a Project-Based Learning (PBL) class that bridges the gap between industry and academia. We have implemented a PBL-type class using blended learning, which combines e-learning with face-to-face teaching. This approach aims to solve the problem in communication, where students with diverse cultural backgrounds are able to collaborate through discussions. Our research confirms the positive impact on the learning effect.

Consequently, we compared average scores between the pre-test and the post-test assessments in measuring the achievement of learning objectives. Post-test scores significantly exceeded those of the prior test, demonstrating students' sense of achievement through the lesson. Additionally, we employed joint work recognition scale to quantitatively assess collaborative work. Factors such as individual intention and mutual concern were compared before and after the execution. The results indicated a decrease in numerical values for certain factors, while the cooperating utility factor showed improvement.

In summary, our study underscores the value of discussions in order to promote collaborative learning among individuals from diverse cultural backgrounds.

1. はじめに

1.1 研究の背景

近年、グローバル化が進展する中で、異なる文化背景や価値観、国籍を持つ者同士による協力の中でよりよい成果を出すことができるグローバル人材育成に向けた取り組みが重要となる。

総務省(2017)によると、グローバル人材の確保状況に関する企業の意識調査によると、「海外事業に必要な人材については、約7割の企業が不足またはどちらかといえば不足している。海外事業に必要な人材は依然として不足している」と回答している。また、企業が大学に求める取り組み内容についても471社が「異文化理解に関する授業の拡大」が求められているとされている。

そんな中で、国内の大学においても異文化理解に関する取り組みとしてグローバル人材の定義に基づき、アクティブラーニングの手法の1つであるPBL型授業(Project Based Learning)による異文化理解や社会人基礎力の習得に向けた取り組み、実践研究が多く見られるようになった。

筆者が勤務する北京語言大学東京校でも3年次の必修科目キャリア関連科目「キャリア指導Ⅰ(前期)」「キャリア指導Ⅱ(後期)」では、日本人学生と中国国籍以外の留学生(以下、「留学生」)が数名によるグループに分かれ、企業から課題を与えられ課題解決に取り組むアクティブラーニングによる手法の1つであるPBL型授業を実施している。これまでの授業では、ビジネス関連資格テキストや就職活動関連テキストを用いて日本式ビジネス接遇マナーや日本と海外での就職活動や組織風土の違いによる異文化理解をといった内容であり、教員の講義中心型講義による知識のインプットによる検定取得を目指し、学校特有のビジネス形式を教室内でのグループワークを通して学習していた。

しかしながら、座学の学びや教室内でのグループワークだけでは、暗記型学習かつ机上の空論であり、社会人未経験の学習者達にとっては、学習で得た知識・経験とリアルな企業社会とのつながりを捉えづらい。大学でこれまで学んできた知識を実社会のビジネス現場でどのように活かしていけば良いか、現時点で何ができるようになり、卒業後どの場面でどのように応用できるかといった学習効果を学生自身が明確に実感しづらい。

また、留学生の日本語レベルに差異があるため、グループによっては、日本人学生に頼る・依存度が高くなってしまい、自分の意見を日本語でうまく表現ができない、どのようにグループへ働きかけていけば良いかわからないため、メンバーとしてただ存在するだけのフリーライダーが数名出てきてしまう。

そのため、せっかく異なる国籍を持つもの同士がグループとして構成されたとしても、双方にとって「見せかけの学習グループ」になってしまい、本来の筆者の勤務校が掲げる教育理念の1つである「異文化理解」を実現することが難しく、さらには協同学習の目的であるチームで協力し、課題達成に向けチーム全員で働きかける中で仲間意識の醸成や達成感を味わいづらいという課題が生じている。

そこで、本研究では、このような状況を改善するために、オープンソース LMS (Moodle4.1.2) と対面授業を組み合わせたブレンド型学習による日中間ビジネスで実際におこり得る課題をテーマにした PBL 型授業 (Project Based Learning) の設計を行い、学修成果の有用性を検証・考察する。

学習目標に達成したかどうかについて、「事前テスト」・「事後テスト」による平均点の変化から、学習目標の到達度と、協同作業における認識を測定し、検証する。協同作業の認識については、長濱・安永・関田・甲原(2009)により開発された「共同作業認識尺度」を用いて定量的測定を行い、授業実施前後による協同作業に対する認識の変化から、ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の有用性について考察・検討を行う。

非同期型コミュニケーションによる学習交流の場となる Moodle と同期型コミュニケーションの場である対面授業を組み合わせたブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計を行ない、異なる文化背景を持つ者同士が互いに課題解決するため、自らの考えを整理してわかりやすい言語や言い回し表現で説明することを、Moodle や SNS 上では読み手に対して、対面授業では聞き手に対して、すれ違いや誤解が生じたかどうか、学習者自身が説明した内容を理解できたかを瞬時に判断し、自己調整をしながら様々な状況に合わせ、相手へ論理的に伝える PREP 法やホールパート法といったロジカルに話すコミュニケーションスキルを用いてわかりやすく意思疎通を行えることを目指す。

チームとしての成果・達成感を味わうこと、大学でこれまで学んだ知識・スキルが実社会のビジネス現場でどのように活かすことができるのか学修効果を学習者が実感できたかどうかを明らかにすることで、今後の授業改善の解決策を検討する。

1.2 先行研究

グローバル人材育成の教育プログラムとして PBL 型授業は、多様化しており、特段企業との産学連携による PBL 型授業は、めざましい社会変化が取り巻くボーダレスグローバル人材育成の重要性教育効果についても多くの研究で実証されている。

尾崎・広瀬・市川・山本(2018)は、「関係者の経験、過去の実践例を基盤として実施される場合が多く、また運用管理の方法が体系化されていない現状である。PBL の成功要因と学習成果、およびそれらの関係を可視化する必要がある、PBL 授業の運用管理を行うことで、担当教員の経験に依存しない PBL 型授業が可能である」と述べている。

また、宮木(2018)は、PBL 型授業が陥りがちな3つの失敗事例を取り上げ「流行のように学校に導入され実施されつつある PBL の中には実際には教育効果をさほど発揮できていないものも少なくない、(1)学生が実は育たない(2)地域・社会のニーズに答えていない(ひどいときは迷惑をかけている)という2つの理由から到底成功しているとはいえない」と述べ、PBL 型授業の設計・実施における重要性和陥りがちな課題を指摘している。さらに「教員とクライアント企業が学生にむけ適切な介入・指導すべきという条件無くしては、高い学習効果が十全に果たすことができない」とファシリテーターとして関わる教員やアドバイザーとして関わる企業による適切な介入の必要性を述べている。目の前に出された課題にただ取り組んで一時的な学生の満足度を図るのではなく、前提条件となる基礎知識やスキルを示しインプットすること、クライアント企業に対して学生だからという奇抜さ・真新しさや珍しさという特別目線を捨て、ビジネス現場で実用できるレベルに達しているか否か、もし達していない場合は、どのような知識・スキルを習得すべきか適切なフィードバックにより、学生自身は、現状と卒業後の「あるべき姿」とのギャップから自身の課題を見つけ、新たな学習目標を自己設定する、このような学習サイクルを生み出す学習デザインを設計することを目指すべきである。

近年、デジタル技術の発達により ICT 化が進む中で、ビジネスにおいてもデジタル技術を活用しながら、他社とのコラボレーションで必要不可欠となる ZOOM などのオンライン会議やチャットツール・協同編集アプリを駆使しデータ情報の交換など、様々な ICT ツールを用いて、成果を出す時代となった。実社会において、これらの知識・スキル・経験を応用し、生産性の効率を上げながら、いかに効率よく、社内の壁を超えて

他社とコラボレーションのプロセスを踏みながら、体験することにより知識やスキルを習得する必要があると考えた。

1.3 研究の目的

本研究では、オープンソース LMS (Moodle4.1.2) による授業教材の提供と学習者同士での授業後互いに感想や質問しながらディスカッションを通して学び合えるコミュニケーションの場とした e ラーニングと対面授業を組み合わせたブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計・開発を行い、学修効果を検証する。

従来のキャリア関連授業では企業へ就職するため、内定獲得に向けたビジネスマナーや面接対策や就職活動に関する知識、履歴書の書き方などインプット中心でいわば企業へ入社する・内定獲得を目指すといった、いわば就職活動を行う上で自己理解と企業理解をする中でキャリア・マッチングする就業先を見つけるためのスキルや知識を教える傾向があった。

しかしながら、企業に内定獲得すること、就職させることを目指すのではなく、本授業における異なる文化背景を持つ者同士による協同学習を通して、グローバル社会においてビジネス現場で他社とのコラボレーションする上で、必要不可欠となるチャットツールや協同編集アプリといった様々な ICT ツールを活用しながら、ボーダレス社会の中で、国・業界・職種・国籍を問わず、一人のグローバル人材として、社内外の人々と円滑に業務を進めていくための課題解決力スキルや他者へ自らの意見を齟齬なく、相手の状況に合わせてわかりやすく伝える発信力として PREP 法とホールパート法といった2種類のコミュニケーション手法を身につけ、実践できるようになることを目指す。また、学習者が大学内を飛び出し、企業や中国本土との人々とオンライン・オフライン上でつながりながら、ビジネス課題に取り組む中で、さまざまな異なる国籍を持つもの同士が互いに働きかけ、学びあえるかどうかを検証する。

2. 経験学習理論に基づく PBL 型授業

2.1 PBL 型授業とは

PBL 型授業には、Problem-based-learning と project-based-Learning の2種類があるが、本研究で扱うのは、アクティブラーニングの手法の1つである PBL 型授業 (Project Based Learning、以下 PBL と表記する) である。

三重大学高等教育創造開発センター(2007)によると、PBL 型授業の類型として、以下3つの授業形態に分類した。

- | |
|--|
| ①『基本型 PBL』
②『チュートリアル型 PBL』
③『実体験型 PBL』 |
|--|

①『基本型 PBL』とは、教員側が問題を提示して、自己学習とグループ学習を繰り返し問題解決に取り組む前者の Problem-based-learning いわゆる「問題発見解決型学習」のことである。

②『チュートリアル型 PBL』とは、各グループにチューターが指導できる中で「問題発見解決型学習」のことである。事例シナリオやビデオ・現場体験で示される問題を理解し、すでに知っている知識・スキルを応用して、他の問題解決に取り組む。

③『実践体験型 PBL』とは、学生が実際の現場での体験を通して課題に取り組み学習する形態をさす。企業の協力を得ながら、実社会で起こりうる課題に取り組む。

本研究で行われる PBL 型授業は、③『実践体験型 PBL』のことを指す。学習者が日中間ビジネスをメイン業務とする企業から、ビジネス実務上現実的に起こりえる課題が与えられ、大学で日頃学んできた中国語をはじめとする中国に関する歴史・文化や政治経済などの知識やスキルを活用して、調査(アンケートやインタビュー)・分析を行い、課題解決に向け取り組み、成果物を発表する実践型教育アプローチである。

PBL 型授業では、単なる知識を一方的にインプットするのではなく、問題解決に向け、少人数のグループで課題解決までのプロセスを通して、主体的・能動的に学ぶことができる。産学連携による PBL 型授業では、学習者が実際の社会や職業において遭遇する現実的ビジネス課題に取り組むことが本授業の焦点である。

実際のビジネス現場でクライアントから依頼されるケースを参考に産学連携による協力企業と教員により協議した上で、テーマ設定を行った。学習が具体的・現実的な学習者が身近に感じられる社会状況に沿ったテーマに取り組むため、学習者は、実践的なビジネススキルや知識を養うことが期待される。

学習者は小グループに分かれ、与えられた問題に対して解決策を見つけ出すため、中国語によるアンケート調査の依頼・実施、その結果に基づく分析・検証を行う。これらの学習過程において、主体的・能動的な学習態度や初対面の方々への接し方、わかりやすく他者へ説明するための発信力といった同期型・非同期型によるコミュニケーションスキル、問題解決力といったスキルがこれらの経験を通して身につける。

さらに、グループ内での協力やディスカッションを通じて、異なる文化背景や価値観、国籍を持つ学習者同士が知識・経験を共有し、相互に学び合うことにより、相手の立場を受容しながら、進める「異文化理解力」を備えることができる。

以上のことから、本研究における『実践体験型 PBL』授業を行うことにより、学習者は自律した学習者として、自己調整しながら主体的に学び、考え、行動することにより、問題解決やコミュニケーションスキルなど、実際の社会や職場で求められるあらゆる知識・スキルを育むことが期待できるとされる。

2.2 協同学習とは

協同学習の「協同」は、「きょうどう」と読み、他に「共同」や「協働」や「共働」など同音類義語が多い言葉である。杉江(2011)は、協同学習の実践者であっても、個人的な理論や手法が違うだけでなく、「協同」の定義が異なることを指摘している。

広辞苑によると協同とは、「ともに心と力をあわせ、助け合って仕事をする事」であり、共同は、「二人以上の者が力を合わせる事。」であるが、「協同」と同義で用いることがあると明記されている。協働は、「協力して働く事」であり、共働は、「生物群集や個体群の間に見られる相互関係」、相互作用と類似語であるとされている。

つまり、ここでいう本研究で扱う学習としては、心と力を合わせて、課題に向けて協力し合うという意味合いから「協同」学習が望ましいと考える。

関田・安永(2005)によると、「協同学習とは、協同して学び合うことで、学ぶ内容の理解・習得を目指すとともに、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶ(内化する)ことが意図される教育活動である」と定義づけている。

さらに、協調学習と協同学習と協同学習という3者の関係性を以下の図のように整理している。(図1)

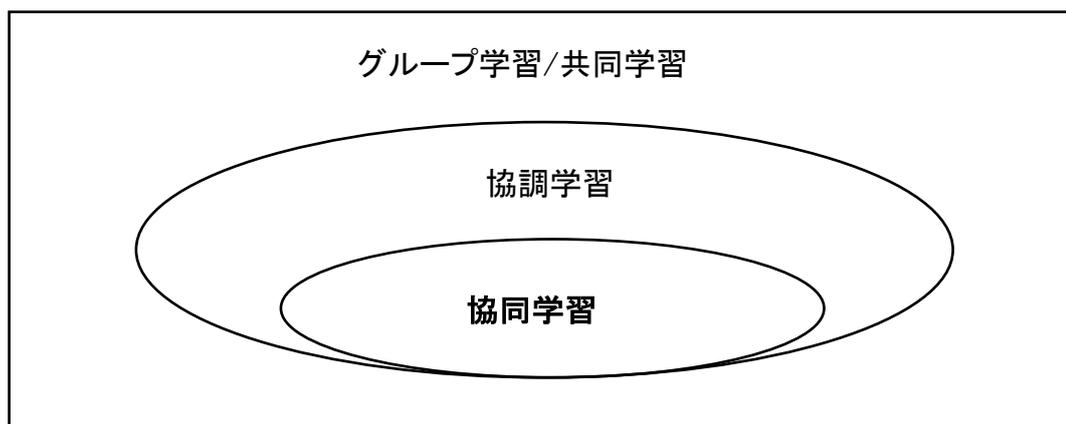


図1 「図1 グループを活用した学習 P15」を抜粋

2人以上の人々が集まりグループを構成し、学習活動を行うのがグループ学習/共同学習であり、さらに、関田・安永(2005)は、協調学習を以下の5つを協調学習の特徴であると定義づけている。「協調学習とは(Collaborative Learning)とは、①プロジェクト(一過性のイベント)の形を取り②メンバーの間で、相手の活動を参照して自分の行動を調整する仕組み(機会)があり③プロジェクトの成果物に対して各自が何らかの貢献を期待され、④しばしばプロジェクトリーダーによって統率される学習であり、⑤質の高い成果物が求められる学習活動である」と定義づけた。また、三宅(2004)は、協調学習には、協同学習に相当する活動も記述されていると述べていることから、協同学習は、協調学習を包括的関係性であることがわかる。

また、関田・安永(2005)は、以下の4つの条件を満たすグループ学習を協同学習と定義づけている。(表1)

表1 協同学習の4つの条件

①互恵的相互依存関係の成立	クラスやグループで学習に取り組む際に、その構成員全ての成長(新たな知識の獲得や技能の伸長など)が目標とされ、その目標達成には構成員すべての相互協力が不可欠なことが了解されている。
②二重の個人責任の明確化	学習者個人の学習目標のみならず、グループ全体の学習目標を達成するために必要な条件(各自が負うべき責任)を全ての構成員が承知し、その取り組みの検証が可

	能になっている。
③促進的相互交流の保障と顕在化	学習目標を達成するために構成員相互の協力(役割分担や助け合い、学習資源や情報の共有、共感や受容など情緒的支援)が推奨され、実際に協力が行われている。
④「協同」の体験的理解の促進	協同の価値・効用の理解・内化を促進する教師からの意図的な働きかけがある。たとえば、グループ活動の終わりに、生徒たちにグループで取り組むメリットを確認させるような振り返りの機会を与える。

出典:関田・安永(2005)P13-14を引用し、表形式にまとめた

したがって、本研究で扱うブレンド型学習を用いた PBL 型授業では、広義的な意味では、協調学習ではあるがさらに狭義的な立場として、表1で示した4つの条件に照らし合わせてみたところ、プロジェクトを継続している過程でも学習者の成長度合いを確認すること(「①互惠的相互依存関係の成立」)、個人間・チーム間の学習目標が設定されること、各自にグループ内の役割責任を設けること(「②二重の個人責任の明確化」)、対面授業でのディスカッションや Moodle の「フォーラム」内や SNS チャットツール内で相互間での協力が学習設計に組み込んでいること(「③促進的相互交流の保障と顕在化」)、協同の価値や内省を深めるための教員側から意図的な働きかけとして、毎時で振り返る機会を設けること(「④「協同」の体験的理解の促進」)、以上の理由から協同学習の4つの条件を満たす「協同学習」の授業設計を行うこととする。

3. ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計と開発

3.1 本授業の位置付け

本研究で扱う「キャリア指導Ⅱ」は、2019年から筆者が実践校で担当しており、前提科目となる「キャリア指導Ⅰ」と本研究で扱う「キャリア指導Ⅱ」は、大学3年次の必修科目である。

3年次までの中国語に関する到達目標として、円滑な中国語コミュニケーション能力が身につけていること、中国に関する文化や国内情勢、政治、経済、貿易といった専門性の基礎を身につけ、中国語でスピーチできることを目指している。(図2)

3年次の「キャリア指導Ⅰ」「キャリア指導Ⅱ」では、卒業後の自らの生き方・職業観を見据え、大学で学ぶ中国語や日本語、英語や母国語といった多言語を運用しながら、異なる文化背景・価値観・国籍を持つ者同士が、互いの考えを尊重しながら、論理立てて相手にわかりやすく自分の意見を発信する力を養うことを目的としている。

対象者は、3年次の日本人学生と中国国籍以外の留学生(以下を「留学生」とする)であり、特に留学生の日本語レベルは、日本語能力検定 N1～N4 レベルもしくは日本語検定未取得と日本語レベルに対しても差異が見られる。

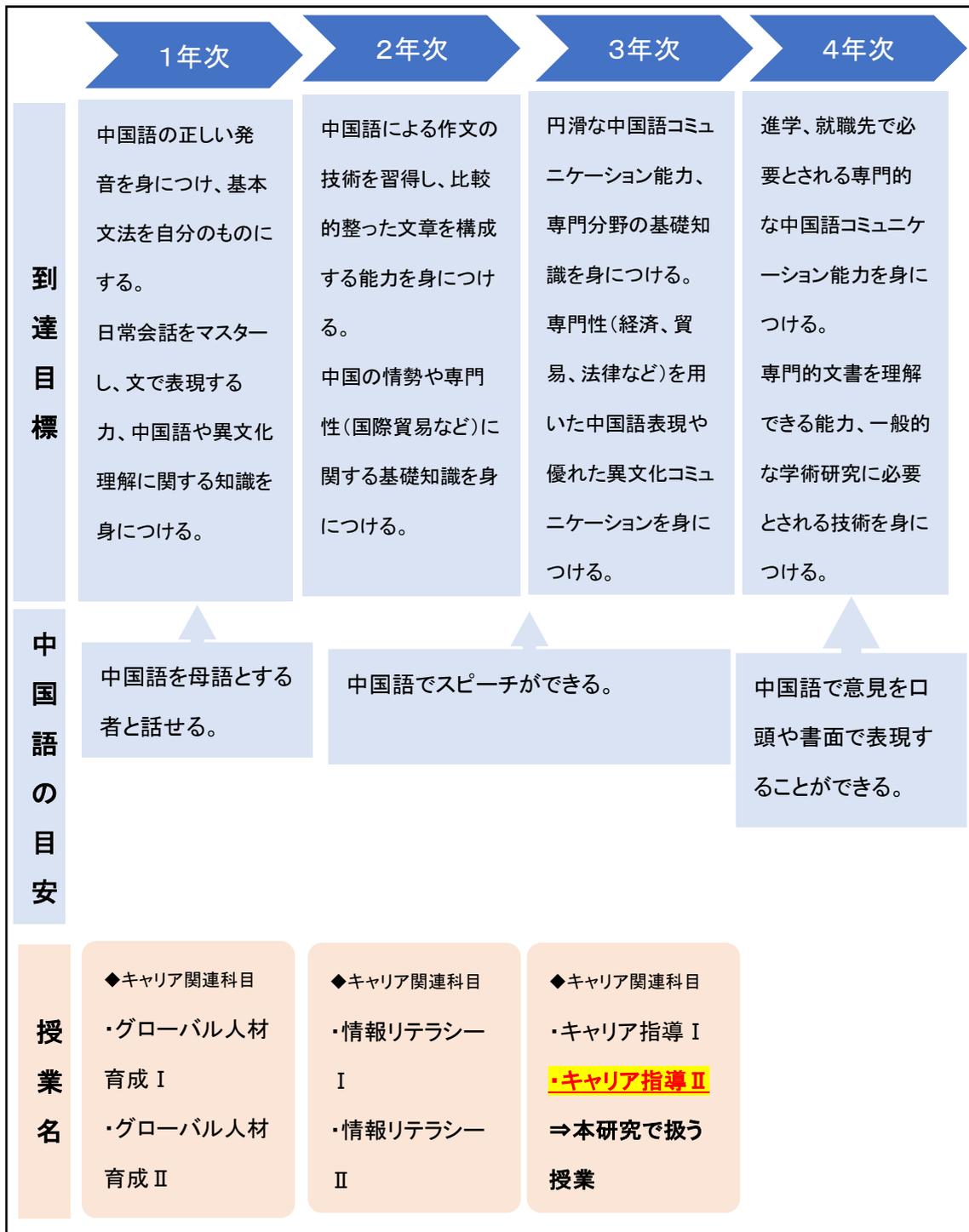


図2 北京語言大学東京校 到達目標・中国語目安・キャリア関連科目

筆者の勤務校は、海外大学であることから、4月入学・9月入学の学生が在籍している。そのため、下記の通り、履修時期は異なる(表2)。

表2 (例)キャリア指導Ⅰ・キャリア指導Ⅱの履修時期について

	2023年 4月～8月(春期)	2023年 9月～2月(秋期)	2024年 4月～8月(春期)
2020年 9月入学	キャリア指導Ⅱ (3年次後期)		
2021年 4月入学	キャリア指導Ⅰ (3年次前期)	キャリア指導Ⅱ (3年次後期)	
2021年 9月入学		キャリア指導Ⅰ (3年次前期)	キャリア指導Ⅱ (3年次後期)

注)本研究で扱う授業は「キャリア指導Ⅱ」である。

本科目の前提科目「キャリア指導Ⅰ」では、企業理解や自己理解を深めるための日本企業の企業風土やビジネスマナー、自己のこれまでの行動を振り返り、就職活動支援サイト内にあるアセスメントツールを用いて、企業理解や自己理解を深めていくが、夏季期間中に「キャリア指導Ⅱ」に向けた導入課題として、長期休暇中に国内外の企業へインターンシップや企業説明会へ参加することを課している。(表3)

表3 本研究で扱う前段階の「キャリア指導Ⅰ」シラバス

授業名	キャリア指導Ⅰ
前提条件	三年次前期学生であること(学内履修規定による) スマートフォンまたはPCで日本語の文字入力ができること
事前テスト	なし 必修科目・一斉授業であることから、事前テストは実施しない。
学習目標	①異文化適応力:日本人や日本企業が大切にしている「空気を読む」「確認会話」「思いやり」「和の精神」や日本と海外の就職活動・採用活動の違いについて独自が考える事例で説明できる。

	<p>②接遇の基本:ビジネス現場で求められる来客・電話応対、名刺交換、訪問時のマナーなどテキストを見ないで相手を不快にさせない態度・言葉遣い・相手の状況や気持ちを汲み取った対応が実演できる。</p> <p>③自らの卒業後の進路に向けて、3年次7月～3月までの具体的なアクションプランを立てる。</p>		
授業の 進め方	<p>対面授業とLMS(GoogleClassroom)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業前授業資料共有(GoogleClassroom内教材閲覧) ・対面授業(講義・ディスカッション) ・授業後振り返り(Googleフォームにて課題提出) <p>※その他:課外活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表のためのグループ内活動あり 		
評価 方法	<p>①課題1(中間試験)グループ内で発表(10点)・成果物(10点)ならびに振り返りシート(20点)</p> <p>②課題2(期末試験)グループ内で制作したマナー動画をチェックリストにより評価を行う。(40点)</p> <p>③課題レポート:各回振り返りシート内にアクションプラン記述有無で評価。アクションプランの1)締切期日2)具体的な行動が書けているかで評価(20点合計 提出率(%)\times20)</p>		
学習 内容	回	到達目標	学習内容
	1	<p>G検Web教材にログインし、問題を解答することができる。</p> <p>LMS(Moodle)にログインし、「ディスカッショントピック」内にコメントを発信することができる。</p>	<p>ガイダンス</p> <p>テーマ研究報告会グループ結成</p>
	2	<p>日本の新卒採用スケジュールと海外の採用スケジュールの違い・共通点を探ることができる</p>	<p>日本の就職活動スケジュールについて</p> <p>日本の採用方法について</p> <p>社会人としての心構え(企業人に必要な要素、職場のルールとマナー)</p>

3	日本と海外の雇用形態や企業文化の違いについて説明することができる。	日本の企業文化・風土について 日本の雇用形態について コミュニケーションについて(好印象を与える話し方・聞き方)
4	日本と海外の新卒採用の違い(採用スケジュール・雇用形態・企業文化など)	テーマ研究報告会 ※中間試験
5	を理解し、他者へわかりやすく伝えられる。 チーム全体で協力し、各々の役割分担に責務を果たし、課題を解決することができる。	●評価方法 ・グループ内で発表(10点) ・成果物(10点) ・発表後振り返りシート(20点)
6	先輩方のインターンシップ体験を聞くことで、インターンシップを「自分事」化し、具体的にアクションプランを記入することができる。	インターンシップ座談会
7	インターンシップの意義を理解したうえで、具体的に参加企業の探し方を習得し、自分で探しエントリーすることができる	外部就職ガイダンス
8	自己の強みが何であるのかアセスメントツールの結果を活用・分析した内容を文章化することができる。	外部就職ガイダンス
9	ビジネス現場で求められる来客・電話応対、名刺交換、訪問時のマナーなどテキストを見ないで相手を不快にさせない	チーム編成 動画テーマ決定 シナリオ作成
10	態度・言葉遣い・相手の状況や気持ちを汲み取った対応が実演できる。	撮影・シナリオ修正
11	《合格条件》	動画編集
12	場面設定による動画の実技試験(挨拶)	マナー動画上映会 ※期末試験

	やお辞儀・電話のかけ方などは、項目ごとのチェックリストを追加して評価する。(×は0個、▲が2個以下で合格)	◎評価方法 ・チェックリスト (40点)
13	日本企業で働くために必要なビジネスマナーやコミュニケーション、異文化理解などを習得できる。	グローバル人材ビジネス実務検定受験

本研究で扱う「キャリア指導Ⅱ」は、3年次後期で履修することになっており、シラバスは下記の通りである

「キャリア指導Ⅱ」の前半では、長期休暇中に自身が参加した国内外のインターンシップや企業説明会、オープンキャンパスでの体験をまとめ、卒業までの残り1.5年に向けたアクションプランを発表する「業界研究報告会」を行う。

また、中盤では、本研究で扱う第10回～第14回(全5回)に向けた外部ガイダンスを行い、ビジネスマナーやスーツの着こなし方、同業他社との比較方法を知る業界研究など最低限企業へ入社後にすぐに役立てるような知識をインプットする。

後半が、本研究で扱う10回～14回(全5回)である。これまでの前提科目「キャリア指導1」と「キャリア指導Ⅱ」の集大成としての位置付けで、企業がリアルに抱える課題に対して、取り組み企業へ提案するまさに最後の実践的な場となる位置付けとなる授業となる。(表4)

表4 本研究で扱う「キャリア指導Ⅱ」講義シラバス

授業名	キャリア指導Ⅱ
前提条件	三年次後期学生であること(学内履修規定による) 前提科目「キャリア指導1」履修済であること
事前テスト	なし 必修科目・一斉授業であることから、事前テストは実施しない。
学習目標	1【協働力】他者との関わりあいの中で自分の強みを活かし、他者と問題解決に向け周囲を巻き込んで働きかけることができる。 2【就活力】就職活動に必要な自己分析・企業研究の手法を身につけ、卒業後進路に向けて「経験⇒振り返り⇒他の状況でも対応できるようルール化⇒就活

	場面で挑戦する」サイクルを繰り返し行うことができる		
授業の 進め方	対面授業とLMS(Google Classroom) ・授業前授業資料共有(Google Classroom 内教材閲覧) ・対面授業(講義・ディスカッション) ・授業後振り返り(Google フォームにて課題提出)		
評価方法	①課題1(中間試験)グループ内で発表(10点)・成果物(10点)ならびに振り返りシート(20点) ②課題2(期末試験)グループ内で発表(10点)・成果物(10点)ならびに振り返りシート(20点) ③課題レポート:各回振り返りシート内にアクションプラン記述有無で評価。アクションプランの1)締切期日2)具体的な行動が書けているかで評価(20点満点・計算方法:提出率(%)×20)		
学習内容	回	到達目標	学習内容
	1	キャリア指導Ⅰで立てたアクションプランに対する活動を振り返り、キャリア指導Ⅱに向けたアクションプランを立てることができる。 卒業後の就労ビザの種類を知る。	ガイダンス 外部機関による特定技能セミナー
	2	Google スライドもしくは PowerPoint を使って資料を作成することができる。 効果的な資料を作成することができる	効果的なプレゼン資料作成
	3	効果的な資料を作成することができる。	業界研究報告会
	4	論理的に相手へ伝わるように話すことができる。	※中間試験
	5	発表者へより深掘りした質問をなげかけることができる。	◎評価方法 ・グループ内で発表(10点)
	6		・成果物(10点) ・発表後振り返りシート(20点)
	7	提案報告会で活用できる同業他社の比較や企業との共通点やメリットデメリット	外部による就職ガイダンス 業界研究セミナー

		を言語化できるスキルを身につけ、比較できるようになる。	
8	提案報告会で実践できる対面と web 上でのビジネスマナーを知る。	外部による就職ガイダンス ビジネスマナーセミナー	
9	提案報告会でクライアントに好印象を持ってもらえるスキンケア・メイクアップ・ヘアスタイル方法を身につけ実践してみる。	外部による就職ガイダンス メイクアップセミナー	
10	提案報告会でクライアントに好印象を持ってもらえる身だしなみスキルとしてスーツの正しい着こなし方を実践してみる。	外部による就職ガイダンス スーツの着こなしセミナー	
11	協働力:他者との関わりあいの中で自分の強みを活かし、他者と問題解決に向け周囲を巻き込んで働きかけることができる。	産学連携による PBL 型授業1 チーム結成・課題設定	
12		産学連携による PBL 型授業2 ターゲット層の絞り方 調査方法	
13		産学連携による PBL 型授業3 情報収集/同業他社比較	
14		産学連携による PBL 型授業4 プレゼンテーション発表リハーサル&フィードバック	
15		産学連携による PBL 型授業5 ※期末試験(プレゼン発表) (株)クララオンライン様 ●評価方法 ・グループ内で発表(10点) ・成果物(10点) ・各回振り返りシート+発表後	

			振り返りシート(20点)
	16	企業で働く上で必要なマナーやコミュニケーション、異文化理解を習得できる。	グローバル人材ビジネス実務 検定 受験

本研究で扱う産学連携によるPBL型授業は、11回～15回までの全5回を扱い、学習目標・評価方法は、当初は下記の通りに設定していた。なお、前提条件は、2022年度時点では、すでに実施されている授業であったため、特段前提条件を設定していない。(表5)

表5 本研究で扱う産学連携によるPBL型授業の学習目標・評価方法

学習目標	協働力:異なる言語・価値観・文化背景を持つ者同士が関わり合いの中から自らの強みを活かし、課題解決に向け、チームを巻き込みながら働きかけることができる
評価方法	グループ内で発表(10点)・成果物(10点)ならびに振り返りシート(20点)

3.2 現状分析

ブレンド型学習を用いたPBL型授業の設計をはじめの前に、筆者が2022年実践してきた「キャリア指導Ⅱ」の本研究で扱う授業である第11回～15回(全5回)に対して、鈴木(2015)『研修設計マニュアル人材育成のためのインストラクショナルデザイン(P3)』の中で紹介された「取り上げる研修の概要」導入課題を参考に、「TOTEモデル」・「カークパトリックの4段階評価モデルによる評価レベル」・「ARCSモデル」の3つの視点による現状分析から行うこととした。(表6)

確認日:2023年4月30日～5月7日

表6 鈴木(2015)『研修設計マニュアル人材育成のためのインストラクショナルデザイン(P3)』「取り上げる研修の概要」を筆者により改変

授業名	キャリア指導Ⅱ
対象者 (誰に)	人数: 67人 対象:3年後期の学生 国籍内訳:日本24・ベトナム38・モンゴル3・ミャンマー2

目的 (何を教える)	【協働力】他者との関わりあいの中で自分の強みを活かし、他者と問題解決に向け周囲を巻き込んで働きかけることができる。
授業方法	11回～15回は GoogleClassroom と Moodle を併用によるブレンド型学習 実施期間:2022年12月～1月 授業回数:第11回～15回(全5回) 1.5時間/回×5回
主たる 学習方法	講義・グループ演習・事例討議

(TOTE モデル) 授業と受講者 現状評価 メモ(現状評価の理由・証拠・対策など)

授業と受講者	現状 評価	メモ(現状評価の理由・証拠・対策など)
必要性:本当に授業が必要な者だけが受講しているか?	まあ まあ	必修科目であるため、履修しないと卒業できない科目のため、必要な科目ではある。
事前準備:授業の準備が十分な者だけが受講しているか?	不明	・授業準備が十分な者だけが受講しているか不明。なぜなら前提テストや事前テストを行っていない。 また、事前課題を課す、事前に授業資料を共有するも誰がいつ閲覧しているか不明。
習得主義:個々の学習者の授業成果を確認するまでは修了と認定しないか?	不十分	・期末試験では、プレゼンテーションをルーブリック評価に基づいて自己評価・他者評価をしているが、ルーブリック評価が適切であるか、第三者に見てもらふ必要がある。 また、前述にあったように「事前テスト」を行っておらず、学習者自身が成果を確認する機会がない。 また、合格条件までは明示していないため、不十分である。
授業効率:授業の成果が確認できた時点ですぐに修了と認定しているか?	NG	・GoogleClassroom の使用時は、すぐには確認できず。また、後半の Moodle 使用時には、課題終了後、完了設定の条件が不十分であった。

(評価のレベル) = カークパトリックの4段階評価モデル

授業の成果	現 状 評 価	メモ(現状評価の理由・証拠・対策など)
レベル1「反応」: 受講者にとって満足がいく好印象の授業だと言えるか?	OK	<p>・授業後アンケートで「発表の満足度」を聞いたところ 67 名中 64 名の学生が「大変良かった 33 名(50%)」</p> <p>「良かった 31 名(47%)」と回答していた。</p> <p>・授業を終えた感想をテキストマイニングしたところ、単語の出現頻度の中で特に動詞の「学ぶ(60.50)」「学べる(14.79)」「できる(4.49)」のスコアが高かったため、満足や達成感があったと考えられる。</p>
レベル2「学習」: 学習者は身につけるべき知識・スキルを授業で修得しているか?	NG	<p>・振り返りシートにより、身につけるべきスキル各項目基準が独自の指標であったため、不明瞭である。先行研究を参考に信憑性のあるデータ収集する必要がある。</p> <p>・学習者が身につけるべき知識・スキルを明確にするために、学習目標(出口)と前提条件(入口)の明確化、出口の修得をどう測るか(事前テスト・事後テスト)の検討が必要。</p>
レベル3「行動」: 研修は学習者の業績上の行動に結びついているか?	不明	<p>・行動変容に結びついたかどうかは、今後授業後フォローアップアンケート調査で調べてみる必要がある。</p>
レベル4「業績」: 授業は組織の業績への貢献(ROI)を意識して設計されているか?	NG	<p>・内定率への影響、例えば面接時に本授業で得たスキル を学チカや自己 PR に織り交ぜて話したかどうか、それが もし内定に影響を与えた場合は、内定率につながる。</p>

ARCS モデル

授業の魅力	現状 評価	メモ(現状評価の理由・証拠・対策など)
注意:好奇心を刺激してマンネリを防ぐ等「面白そうだ」と思えるような工夫があるか?	まあまあ	<p>・テーマが「日本企業の中国本土へ向けた新ビジネス展開の提案」ということもあり、中国の文化や経済と日本ビジネスとどうつなげるかという視点では、面白そうだという工夫はされている。</p> <p>しかし、もう少し踏み込んで企業名やビジネス内容など詳細まで具体化させることでよりリアル感を持たせるカバーストーリーなどの修正が必要である。</p>
関連性:職務上の問題と授業をつなぐことで「やりがい」を高める工夫があるか?	OK	<p>・実際に中国本土へ向けて日本企業に対してコンサルティングサービスを行う企業の社員の方へ提案し、直接フィードバック・評価をもらえるのでやりがいを感じてもらえる工夫はあった。</p>
自信:段階的に習得していることが自覚できるなど「やればできる」と思える工夫があるか?	不十分	<p>・感想を AI テキストマイニングで解析したところ、「できる・出来る」や「成長」というワード頻出が高い。しかし、まだ段階的に習得していることが視覚的に自覚できているかが不十分のため、工夫が必要である。</p>
満足感:授業終了後に「やってよかった」と思える工夫があるか?	まあまあ	<p>・授業アンケートでの感想を AI テキストマイニングで解析したところ、「お疲れさま」や「楽しい」「ありがとう」というワード頻出があったため、少なからずやって良かったと思えている。</p>
自律性:やる気は自分でコントロールすべきであり、それは可能であると思わせる工夫があるか?	不十分	<p>・Moodle 内にコメントしたり、相手からのコメント・指摘を受け調べたことや実際に現場調査した内容を返信するなどやる気をコントロールする行動変容はあったが、自律性を促す工夫としては</p>

		まだまだ不十分。
--	--	----------

さらに、2022 年度後期の受講対象者 10 名に PBL 型授業実施後アンケート調査を実施した。彼らは、すでに就職活動を終えた学生もしくは内定獲得後就職活動を継続中の学生や来春中国の大学院進学を目指す学生 10 名が以下のように回答した。

今後も継続してほしいこととして「留学生と日本人学生との共同学習をすることで、普段関わらない学生同士が主体的に学ぶきっかけになった。」、「最終プレゼンテーションで企業の方から評価をもらえるという経験により比較的満足度が高かった。」と答えた。また、日本人にとっては日本語が苦手な留学生に対してどう働きかければ良いか、留学生としては、日本語スキルの上達や日本人とどのように関わると良好な関係が築けるか学びにつながったという回答が目立った。

その一方で、改善点として、「グループ内で積極的に行動できない・やる気がない学生への対応について」や「リーダーの負担が大きかったと感じます。消極的な子を積極的に行動しやすいように、リーダーや他のチームのメンバーへのサポートができなかった。」というコメントがあり、課題に対する取り組む仕事量に個人差が生じてしまうため、チーム毎に教員への働きかけの工夫、いわゆる「フリーライダー」問題があることがわかった。

以上のコメントから、グループワークに取り組む上で、仕事量に個人差が生じてしまい、日本語の発表は日本人学生や PPT スライド作成の学生のみが自然に仕事量が多くなってしまうこと、日本語ネイティブな日本人へ依存してしまい留学生が何もしない状況、「フリーライダー問題」が生じてしまい、学生たちの課題に対する達成感を味わえない、取り組む上で誰かが楽をし、誰かが苦勞をするといった取り組む上で不平等や目に見えない国・言語のスキル差による差異・学習に対するモチベーションの温度差が起こっていることがわかった。

そのため協同学習に対して達成感を味わえないまま学習者同士がなんとも言い難い気持ちのしこりを残したまま、終えてしまっている現状が本授業の大きな課題であることがわかった。

3.3 ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の設計と開発

3.3.1 ブレンド型学習を用いた PBL 型授業の全体像

本研究で扱う「キャリア指導Ⅱ」(必修科目・全 15 回)のうち、本授業で扱うブレンド型学習を用いた PBL 型授業(全 5 回)は表のとおりである。

PBL 型授業を設計する上で、「プロジェクト計画に不可欠な7つの要素(訳者池田・吉田,2021)」を考慮する必要があると述べている。そこで、本研究で扱う PBL 型授業についても以下の「プロジェクト計画に不可欠な7つの要素 訳者池田・吉田,(2021)」(図3)を参考に当てはめ、授業設計することとする。

①挑戦的な問題や疑問

課題設定を、難しすぎず、簡単すぎず適切な難易度を設定することとする。今回企業と課題設定としたテーマ内容は「中国本土の若者に向けて、これから中国で流行りそうな商品・サービスを新ビジネスとして展開していきたい。新ビジネスの提案をしてほしい」と設定した。これは、正解がない問いであり、かつ学生達にとっても少し困難であるが、頑張れば解決策がいくつか見いだせそうな挑戦しがいのある課題の難易度である。

②継続的な探究

学生は、この課題解決に向けて、対面授業では、テーマを提示した企業の関係者や教員、グループ内メンバーとの同期型ディスカッションに取り組む中で、Moodle 内では、各回で出される課題の成果物に対して、他グループメンバーとの非同期型ディスカッションを通して質問・回答を繰り返すこと、アンケートやインタビューといった調査を計画・実行し、「なぜ？」の根拠・理由を見出す必要がある。継続的に経験を概念化し、深い探究心を持って掘り下げていくことを、絶えず学習過程の中で行なっていく。

③「本物」を扱う

彼らの身近な題材となるように、学習テーマの設定では、実際に産学連携で協力いただける企業と話し合い、実際に日中間ビジネスにおいてクライアントから出てくる傾向がある案件を選定した。教員と企業により設定した。今回の学習テーマを「中国本土

の若者に向けて、これから中国で流行りそうな商品・サービスを新ビジネスとして展開していきたい。新ビジネスの提案をしてほしい」というテーマに設定することにより、「本物」のテーマを扱うこととした。

④生徒の声と選択

教室づくりとして、本PBL型授業では、授業進行やMoodle内の課題内容も出来るだけファシリテーターである教員と学生間で話し合いながら進めることを心がける。特に、グループメンバーに関しては、出来るだけ学生たちの主体性へ働きかけられるように、以下の条件を提示したうえで、学生達にグループ構成を任せた。

グループメンバーの振り分けは、ファシリテーターである教員から「チーム結成のための5条件」を提示し、クラス内学生全員による合意形成に基づいた話し合いで、1グループ 4～5 人のチーム結成を行なう。

●チーム結成のための5条件

- (1) 面識ない者同士で構成されている
- (2) 国籍のバランスを考慮する
- (3) 男女比のバランスを考慮する
- (4) 語学スキル(日本語・中国語)は考慮しない
- (5) 各グループに最低 1 名の日本人学生が入る

また、授業の各回では、グループでのプロジェクトの進捗状況を発表させ、クラス内で意見表明や表明した意見に対する質問、回答を各グループメンバーが日本語スキルの差異により説明が難しい場合には、グループメンバーや同じ母国のクラスメイト達が擁護する場面を設定するなど、出来るだけ学生同士の声が活発に出る教室作りを試みることとする。

⑤振り返り

学生達は、各回の授業において振り返りシートを用いて、グループ内の1週間の活動に対して、前回の授業からの進捗やチーム内のルールやスケジュールの確認作業

を行う中でチームにどのように貢献したかをメンバー同士に相互評価を行うことを目的に振り返る時間を設ける。

また、最終回で発表後はこれまでのプロジェクトに対して、個人としてチーム貢献度を振り返ることにより、自分に対する課題をどのように克服できたか、どんな課題を残してしまい、授業後どう課題に対して解決していきたいか、リフレクションシートを作成・提出することにより、この授業を通した振り返る機会を設けることとする。

⑥批評と修正・改訂

第2回において、PREP法とホールパート法のレクチャー後は、第2回～第4回までは、各グループの代表者による進捗報告を対面授業時に行う。これは、最終回プレゼンテーションまでの練習の機会を与えることを目的としていること、さらに他グループから批評をもらう中で、グループ以外の新たな視点をもらえることにより成果物の内容修正以外にもグループとしての活動・スケジュール修正を行うことができる。

さらに、企業に対して最終回だけに関わってもらうのではなく、プロジェクトが開始した段階から、各チームの共有フォルダを作成しそこへ格納した成果物を企業の方がコメントありの閲覧をすることにより、成果物の内容を修正することができる。最終回の発表のみ企業に関わってもらうのではなく、彼らのプロジェクト開始の段階から学習の過程において、企業からの批評をもらい修正するというサイクルを繰り返すことにより、学びをより深める機会となる。

また、Moodle内においても、各グループが各授業でのチーム課題に対して、互いに途中経過の成果物を見せ合い、批評コメントしあうことでも成果物をブラッシュアップさせることが可能となる。

以上の学習活動を通して、学習者は、批評と修正を継続的に行うことにより、成果物をより良いものに完成させるだけでなく、多くの学びを促進させることが期待できると考える。

⑦成果物を公にする

最終回(第5回)では、学生が課題テーマに対する「提案報告会(成果物の披露)」を実施する。これまでにグループで取り組んだ内容を実際に企業の方へ見てもらい、

質疑応答・フィードバックをもらうことにより、これまで大学で学んできた知識・スキルがビジネス現場レベルで活かされていることを認識することができる。学生にとっても、授業後の自信につながるだけでなく、さらに他教科との関連性も見出すことでさらに学習意欲も高まり、自らの課題を持って、次なる学びのステップへ取り組む足掛かりとなると考えている。

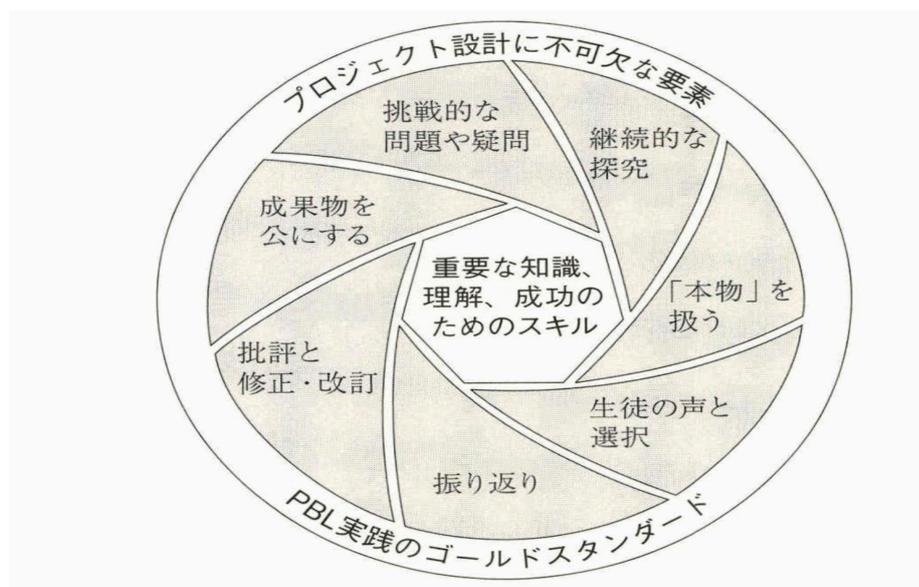


図3 PBL 実践のゴールドスタンダードにおけるプロジェクト設計に不可欠な七つの要素(出典:訳者池田・吉田,2021 の図 0-1を抜粋)

本研究で扱う5回の授業構成は、次のとおりとなる。(表7)

表7 本授業の構成

回	内容	必須課題(★チーム ◆個人)	評価
1	ミッション確認・グループ結成 情報集約・ニーズ分析とは	★チーム結成シート・グラドルールの提出(Moodle/LESSON10【課題1】) ◆商品のアイデア出し (Moodle/LESSON10【課題2】)	

2	ビジネスプランの立て方 効果的なプレゼンとは	★ニーズ分析調査方法 (Moodle/LESSON11【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON11【課題2】)	・振り返りシート (10点)
3	中国ビジネス展開する上で 気をつけたいこと～無印良 品の判決事例から考える。	★提案書(仮)PPT (Moodle/LESSON12【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON12【課題2】)	・振り返りシート (10点)
4	プレゼンテーションリハーサ ル	★提案書(本番)PPT (Moodle/LESSON13【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON13【課題2】)	・振り返りシート (10点)
5	プレゼンテーション発表 (期末試験)※企業の方から FB	◆リフレクションシート (Moodle/LESSON14【課題】)	・事後テスト(50 点) ・リフレクション シート(20点)

毎回のブレンド型学習によるPBL型授業の進め方は、オフラインである対面授業では、グループ内でのディスカッションや進捗状況をクラスでシェアリングするプレゼンテーション、他グループや教員からのフィードバックをメインとして行う。

また授業外活動として、Moodleにより、グループ課題や個人課題を成果物として投稿し、Google共有フォルダ内にもグループ課題資料を格納してもらおう。共有した途中経過の成果物資料を企業側に閲覧できるようにし、企業よりコメントをもらい、さらに軌道修正を行えるようにする。

また、授業外活動としてグループ内での話し合いには、学内で教員・学生間で用いられている中国版SNSチャットツール「Wechat(微信・Weixin)」やWeb会議ツール「ZOOM」を活用しながら、成果物の準備を進めていく。(図4)

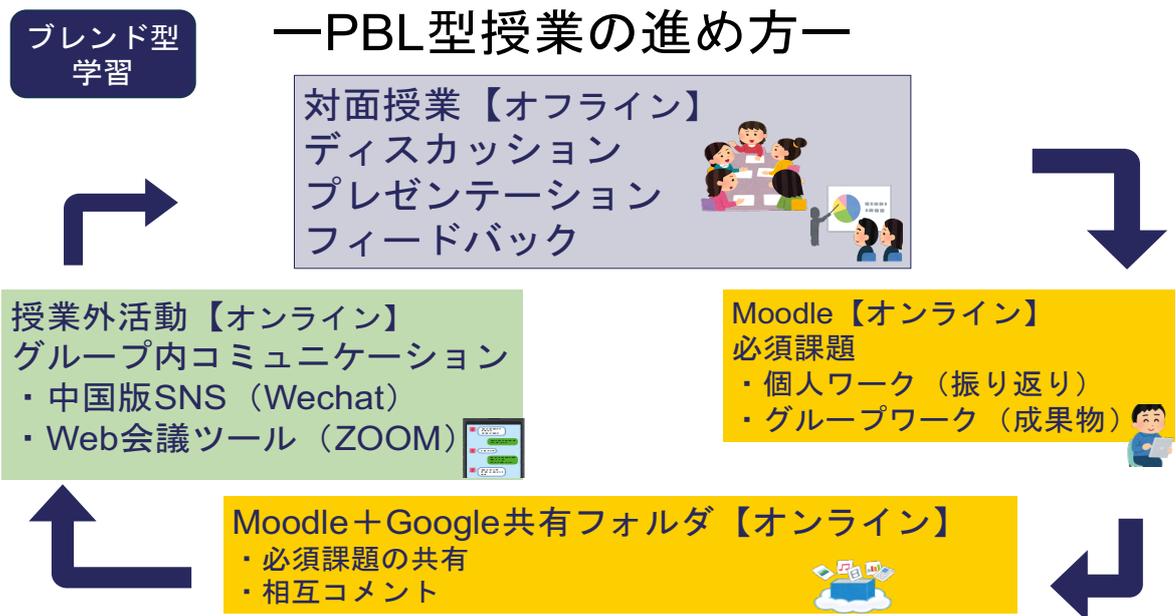


図4 ブレンド型学習によるPBL型授業の進め方

また、各回の授業の進行に関しては、人の学びのプロセスに遡って、教材の構成を考えていくための枠組みとされているガニエの9教授事象(鈴木・2002)をアレンジして、ブレンド型学習のサイクルそのものをPBL型授業で扱うという枠組みと考え、「1.学習者の注意を喚起する→2.学習目標を知らせる→3.前提条件を確認→4.新しい情報を提示する→5.学習の指針を与える→6.練習の機会を設ける→7.フィードバックする」までを対面授業形式で、「8.学習の成果を評価する」は、Moodle や Google 共有フォルダを用いた e-learning コンテンツ教材として、「9.学習の保持と転移を促す」がは、授業外グループ活動の中で行うといった学習サイクルを行う。

したがって、以下に示した表がガニエの9教授事象に基づいた各回のブレンド型学習の流れとなる。(表8)

表8 ガニエの9教授事象に基づく各回のブレンド型学習の流れ

形式	流れ	時間	9教授事象	内容	使用ツール
対面	導入	15分	1.学習者の注意を喚起する	各回の流れをアナウンス	

			2.学習目標を知らせる	各回の学習目標を知らせる	
			3.前提条件を確認	前回授業からの授業外活動の振り返り(グループ内貢献度・話し合った内容の情報整理)	
		15分	4.新しい情報を提示する	〈情報伝達〉 第1回:協同学習とは 第2回:PREP法・ホールパート法/プレスト・KJ法 第3回:判例から中国ビジネスを考える	
	講義		5.学習の指針を与える	話し合う事柄をアナウンス	
		30分	6.練習の機会を設ける	グループ内で提示された事柄について話し合う(ディスカッション)	
	実践	30分	7.フィードバックする	グループ内で話し合ったことを発表。他グループや教員からアドバイスをもらう。(シェアリング&フィードバック)	
	まとめ				
e-learning	必須課題	—	8.学習の成果を評価する	必須課題に取り組む グループ間・クラス間で必須課題に対するコメントを相互間で行う。	<ul style="list-style-type: none"> •Moodle (LMS) •Google 共有フォルダ

授業外活動	グループ活動	—	9.学習の保持と転移を促す	Moodle 内でもらったコメントをグループ内の話し合いで授業後に確認し合う	<ul style="list-style-type: none"> 中国版 SNS チャットツール (Wechat) web 会議ツール (ZOOM)
-------	--------	---	---------------	--	--

3.3.2LMS (Moodle) 教材の設計・開発

本研究では、e ラーニングによるオープンソース LMS (Moodle4.1.2) による授業教材コンテンツの開発を行なった。

授業ごとに、TOTE モデルを活用し、授業で投影する「投影資料(使用教材)」と補助資料に関しては、閲覧することを完了条件とした。また、課題に関しては、Moodle の基本機能である「フォーラム(掲示板)」での投稿回数に関して、個人課題では、「トピックを立ててコメントすること」を 1 回以上かつ他のグループメンバーへ「返信すること」を完了条件として設定した。(図5)



図5 第1回 授業の実装

課題は各回ともグループ課題(課題1)・個人課題(課題2)の2種類を提出してもらう。グループ課題(課題1)に関しては、筆者の学内専用 Google アカウントより、Google 共有フォルダを設定し、学生には、「協同編集」権限を与え、企業には「閲覧(コメント可)」権限を与えた。

Moodle のサイトから学生達は、課題を格納先へアップロードできるように Moodle 内に URL リンクを貼り付ける。

学生達は、課題1に関しては、①Moodle 内②Google 共有フォルダ内の2箇所へ資料を提出することとなる。

課題1 (グループワーク) / チーム結成確認シート・グラドルールの提出

各チーム①②を行ってください。

①下記のURLへ各チーム代表者は、チーム結成確認シートとグラドルールを作成し、格納してください。

- ・チーム結成確認シート
- ・グラドルール

②格納したら、「ディスカッションピック」内に提出を完了したことをコメントしてください。

件名: (チーム名)

本文:

チーム〇〇〇〇です。

チーム結成シート (URL)

グラドルール (URL)

を格納しました。チームの皆さん、確認をよろしくお願いたします。

チームの皆さんは「返信」に代表者へ感謝メッセージをコメントしましょう。

筆者の大学用 Google アカウントによる Google フォルダを共有フォルダとして設定。

Moodle 内では、チーム内で労いコメントや補足コメントとして「ディスカッションピック」を利用する。

図6 第1回 授業 課題1 (グループ課題) による実装

理由

なぜカプセルティを使用するのか?

①中国での知名度が高いから
→独自アンケートでは90%以上が知っているという回答

②気軽に体験できるから

筆者の大学用 Google アカウントによる Google 共有フォルダ内資料に対して、企業からコメントをもらい、学生が返信する。

図7 第4回 授業 学生が提出した課題の Google 共有フォルダ内

①Moodle 内においては、グループ間同士で提出したお礼や補足コメントができる学生⇄学生間同士自由に非同期型コミュニケーションが実現できるプラットフォームを構築した。(図6)

②Google フォルダ内では、企業から直接コメントをもらえる成果物を完成させるまでに企業⇄学生間が自由にディスカッションできるプラットフォームを構築した。(図7)

個人課題(課題2)は、第1回はアイデア出しを課題にしている。(図8)

課題2(個人ワーク) 中国本土でバズる商品・サービス！？アイデア出しをしてみよう

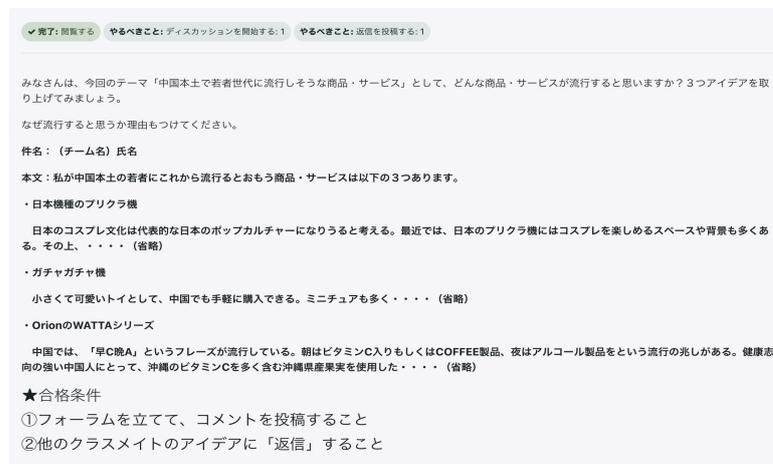


図8 第1回 授業 課題2(個人課題)による実装

また、第2回～第5回までは、活動報告を課題としており、対面授業内で行った振り返りの時間に行ったグループメンバーと相互評価した「活動報告書」を参考に、グループへの貢献度やグループ内で話し合った内容の情報整理し、次週に向けた活動目標などを「ディスカッショントピック」を立てて、投稿する。(図9・図10)

課題2(個人ワーク) 活動報告書



対面授業で行った「活動報告書」作成後、Moodle内にも同内容を①「ディスカッショントピックを立てる」よりコメントを投稿する。②他メンバーが投稿した内容に対し、「返信」する。①・②が完了すると、「活動完了」となるように設計する。

図9 第2回目授業 課題2(個人課題)による実装

▼ 活動完了

完了トラッキング 条件を満たした場合、活動完了を表示する

閲覧を必要とする 完了するには学生はこの活動を閲覧する必要があります。

評価を必要とする 評定未必須
 この活動を完了するには学生は合格点に達する必要があります。

必須投稿数 学生は次の件数のディスカッションまたは返信を投稿する必要があります。 2

必須ディスカッション数 学生はディスカッションを作成する必要があります。 1

必須返信数 学生は次の件数の返信を投稿する必要があります。 1

期待される完了日 16 12月 2023 22 49 有効にする

図10 第2回目授業 課題2(個人課題)による「活動完了」条件設定

特に第2回以降の個人課題の内容については、鈴木(2002)や市川・根本(2016)、松尾(2011)によるコルブの「経験学習モデル」を参考にした。対面授業においてディスカッションやフィードバックという「具体的経験」をし、グループメンバーと相互評価した「活動報告書」に基づき、個人課題を通してその内容を自ら振り返る作業である「省察的観察」を行い、Moodle内でさら学習者同士によるフィードバックから、「抽象的概念」化させた上で、対面授業前までの課外活動としてグループ内の話し合いで応用していく「能動的実験」を行う。これらのサイクルを第2回から第4回までの課題の中で繰り返すことで、協同学習を進めていく。(図11)

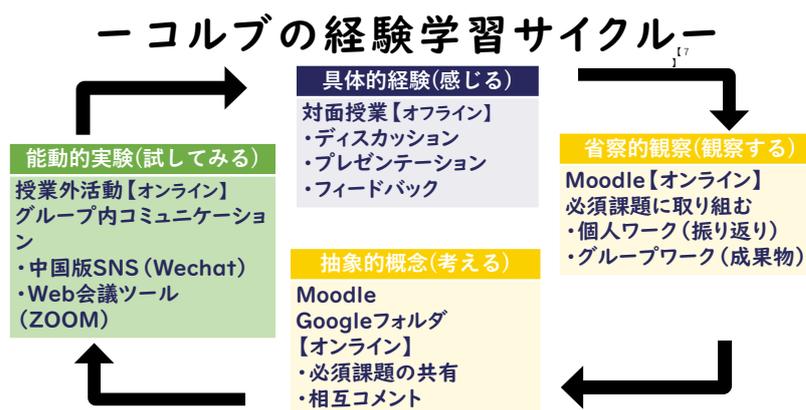


図11 鈴木克明,「学習設計マニュアルー「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン」,P185,『図 17-1 コルブの経験学習サイクルと学習スタイル』北大路書房(2002)を参考に作成

4. PBL 型授業の評価と改善

4.1 実務家によるエキスパートレビュー

本授業での学習目標に対して、学習者が到達したことを測る方法を明確にするために、就業先の同グループ校専門学校2校のキャリアコンサルタント2名(グローバル人材ビジネス実務家)にエキスパートレビューを依頼した。

依頼した理由は、2点ある。1点目は、二人とも国家資格キャリアコンサルタントであり、A氏は国家試験キャリアコンサルティング技能士1級を持ち日頃からキャリアコンサルタントの養成講座を担当しており、B氏も国家試験キャリアコンサルティング技能士2級を持ち、前職で駐在員として様々な国でのグローバルビジネス経験がある。

また、同グループ校において日本語スキルにばらつきのある留学生と日本人学生によるキャリア関連科目の授業を担当しており、筆者が5年目であるのに対し、両名ともにグローバル人材の就職指導をA氏は6年目、B氏は8年目と筆者より経験年数が長い。

以上の理由から、グローバル人材ビジネス実務家としての観点からのエキスパートレビューを依頼した。

4.1.1 実務家によるエキスパートレビューによる結果

レビュー方法として、事前に資料6点(①事前テスト/前提条件記述あり②事後テスト③教材④授業後アンケート⑤異文化感受性発達度アンケート(日本語版 IDI)⑥エキスパートレビューヒアリングシート)の6点送信し、社内 Teams を用いて、両名に共有した。

その後、レビュー当日(2023年9月21日(木)10:00~11:15)は、オンラインビデオ会議ツール「ZOOM」にて同期型インタビュー形式で75分間実施した。

先に研究の背景や目的なども伝えて、授業の概要・授業方法・評価方法を説明しながら、⑥エキスパートレビューヒアリングシートに沿って、質問に回答してもらいながら、進めた。

インタビューの報告は、下記のとおりである。(表9)

◆評価基準:

そう思う・やや思う・どちらともいえない・思わない・全く思わない

表9 実務家エキスパートレビューアンケート結果

(1) 学習目標について

評価項目	評価結果	結果を受けての改善点
① 本授業の「学習目標」は妥当か。	A: やや思う 学習目標としては良いが、「 <u>協働力</u> 」の <u>言葉がわかりづらいため、削除でいいのでは？</u> B: そう思う 「 <u>協働力</u> 」とは何か？など日本語での標記でその <u>学習目標が明確に理解されているかが重要</u> 。シラバスとは連動する内容のため、妥当である。	学習目標を以下の文言に変更する。 1 自身の強みを自己体験に沿って説明することができる。 2 異なる文化背景をもつ者と意見をまとめ、課題に対して提案することができる
② 「学習目標」に対する課題テーマ設定は妥当か。	A: やや思う チームビルディングを共通目的としているところはGOODです。 B: そう思う 妥当である。	課題テーマ設定は、前回の設定でも良いが、旧)『商品の提案』→新)『商品・サービスの提案』にして、学生が自由な発想・創造力を持って提案できる課題内容に改善することを協力企業側とも相談する。

(2) 前提条件について

質問	回答	回答からの改善
① 本授業の「前提条件」は妥当か。	A: やや思う 大事だと思う。特に <u>ビジネスマナーは企業が介入する分、企業に迷惑をかけるためにも必要</u> であり、工夫されていると思う。 B: やや思う 留学生の日本企業文化への理解や <u>ビジネスマナーを知っていることは必須</u> です。	日本語レベル差異により文字だと誤解が生じる可能性があるため、前提条件を「口頭テスト」に変更し、留学生の日本語レベルに合わせ、同じテスト内容でも日本語の言い回しを変える、合格基準は明確にするなどの工夫を行う。 ① 日本と海外の就職活動や企業文化が異なることを知っている

		②日本のビジネスマナーを知っており、日本の面接へ行くスーツの着こなしが実践できている。
②「前提テスト」は妥当か。	A: やや思う チームビルディングを共通目的としているところはGOODです。 B: どちらとも言えない 学生の日本語レベルに合わせて誰もが できているテスト指標が必要。	

(3) 事前テスト・事後テストについて

質問	回答	回答からの改善
①「事前テスト」は、本授業を必要とする人とそうでない人が判別できているか。	A: どちらともいえない <u>回答4択の内容理解が困難か？質問項目も含めて、多言語化してみた方が回答者のミスマッチが少ないかもしれない。</u> B: どちらともいえない 質問内容は、適切であるが、 <u>スケール(1(小さい)←2・3→4(大きい))クエスチョンを利用して内容をシンプルにした方がテストを受ける側のストレスを最小限に抑えることができる。</u>	「事前テスト」「事後テスト」は同レベルであるが、日本語スキル差による課題が残る。 二人からも質問項目・評価基準に関して、もう少しやさしい日本語で解答できる工夫をするようにと共通するアドバイスをもらったので、以下の改善を行う。 1. 事前テスト・事後テストを再作成 事前テスト・事後テストを共に質問項目を留学生でも答えられるように、「一般社団法人 留学生支援ネットワーク」の教育機関向け支援ツール：『社会人基礎力チェックリスト(行動変容評価)』の a) ガイドラインの一部 b) 評価ランクを修正 した「社会人基礎力チェックリスト」を作成する。 2. 日本語教師による日本語チェック
②「事前テスト」・「事後テスト」は同レベルの問題か。	A: そう思う B: そう思う 同じかどうか、テストの実施方法をもう少し工夫しても良いのではないか。	

<p>③ 学習目標を達成できたかどうか、「事後テスト」の結果から判断できたか。 ※1</p>	<p>A: やや思う 自己評価であるための学習効果の確認は可能 B: そう思う</p>	<p>質問項目・評価基準を日本語教師の先生へ文言チェックをしてもらえない」の4段階評価にする</p> <p>4. 事後テストの実施方法について 事後テストでは、自身の成長があったかどうか自己チェックを行うため、事前テストとの比較が必要。しかし、事後テスト受験前に事前テストの結果を出してしまえば、意図的的回答になってしまい、信頼性を欠く恐れがある。そこで、事後テストにてスキルチェックをしてから、事前テストの結果を配布し、自分のスキルが身についたかどうかを回答させる方法に変更する。</p>
<p>④ 「事後テスト」は学習目標を直接反映した質問内容だったか。</p>	<p>A: そう思う B: そう思う 同じかどうか、<u>実施後テストの実施方法</u> <u>やテストの解答形式をもう少し工夫して</u> <u>も良い</u>のではないかと。</p>	<p>方向性としては、現状維持とする。</p>
<p>⑤ 必要のないことが質問内容にあったか。</p>	<p>A: 全く思わない B: 全く思わない</p>	<p>方向性としては、現状維持とする。</p>

(4) 教材(Moodle)について

質問	回答	回答からの改善
<p>① 教材の導入に教材の使い方の説明があったか。</p>	<p>A: やや思う 特に Moodle を活用して、学生の主体性を促進しているところは大きく評価できる。 B: そう思う</p>	<p>今後も Moodle を活用することは継続する。</p>
<p>② 一度に多く</p>	<p>A: どちらともいえない</p>	<p>セクションごとでやるが増えてくる</p>

のこと(10以上)を教えようとしていないか	B: 思わない	のは、それだけ成果物(提案書)の完成に近づけば行くほど必然的であると考え。10以上のことは教えない工夫は継続する。
③全5回の全体スケジュール(流れ)は示されているか	A: そう思う <u>授業を受ける側の能力によってスケジュール(流れ)の濃淡は可変できることが望ましい。</u> B: そう思う 明確に表示されている。	全5回のスケジュールの流れについては、Moodle 教材資料での提示、対面授業時では、全体アナウンス、日本語スキルに問題がありそうな留学生数名に向け、個別対応をする工夫を行っていききたい。
④説明と例示があったか	A: そう思う B: やや思う 必須課題は、理解の浸透が特に重要であるため、簡潔明瞭すぎるくらい、シンプルくらいが良い。	Moodle 内での必須課題説明と例については、説明がくどかった箇所もある。 シンプルかつ色分け・文字の大きさの工夫を行い、必須課題説明の箇所は、改善する。

(5) 評価方法について

今回の PBL 型授業での評価方法には①～④を使用しておりました。また、次回より追加として長谷川(2019)の「図 3 ルーブリック評価シート(秋学期)」を参考に、「プレゼンテーションルーブリック評価シート」を作成。⑤異文化感受性発達モデルに基づく尺度ツール『日本語版 異文化感受性発達尺度(IDI)』は、山本・丹野ら(2002)、坂田・前田ら(2005)が用いた『日本語版 異文化感受性発達尺度(IDI)』をそのまま取り入れて調査方法を取り入れることを検討する。

- ①プレゼンテーションルーブリック評価シート
- ②各回のふりかえりシート(自己評価・他者評価)
- ③事後テスト
- ④実施後アンケート
- ⑤異文化感受性発達モデルに基づく尺度ツール『日本語版 異文化感受性発達尺度(IDI)』

以下の①～⑤のツールは、本授業の有効性・学習目標到達度を測定するための評価方法・調査方法として、妥当ですか。

質問	回答	回答からの改善
①プレゼンテーションループリック評価シート 【学習評価ツール】	A:どちらともいえない 日本語スキルの理解力にも左右されるため、 <u>やさしい日本語にするなど言語表現には課題が残る。</u> B:そう思う 非常に評価項目がわかりやすい構成になっている。	評価・項目内容は変更せずに、日本語の言い回しを以下 2 点の改善を行う。 1日本語教師による日本語チェック 項目・評価基準を日本語教師の先生へ文言チェックをしてもらい、やさしい日本語スキルが低い留学生でも評価できるように改善する。
②各回のふりかえりシート (自己評価・他者評価) 【学習評価ツール】	A:やや思う B:そう思う 「私の今週のチーム内貢献度は(%)」は自己申告ベースなのか？ <u>自己評価&他者評価があっても良い</u> のでは。	各回の振り返りシート「チーム内貢献度(%)」については、チーム内評価者も記入できるように加筆する。
③事後テスト 【学習評価ツール】 【調査方法ツール】	A:やや思う B:そう思う	※1参照
④実施後アンケート 【調査方法ツール】	A:そう思う 講師の教授強化、授業(シラバス、学習目標、課題達成度)評価であり、教師にとってとても重要であり貴重なアンケートである。 B:やや思う	授業実施後アンケートとしては、今のところ継続する。 ただし、やはりフリーライダーやチーム内トラブルが起こった場合の建設的議論の場の提供に対しては、授業内で設けるか授業外の時間にオンライン上

	<p>参加者の主体性を重視しているので、フリーライダーを出さない工夫をしている。ただし、フリーライダーを防止するだけでなく、<u>この様なメンバーが発生した時にチームとして(心理的安全性を担保とした上で)どのように話し合うかを建設的に議論できる場があるとなお良い。</u></p>	<p>の相談会(例:キャリアセンターでのランチ相談会)を設けるかを検討する必要がある。</p>
<p>⑤異文化感受性発達モデルに基づく尺度ツール『日本語版 異文化感受性発達尺度(IDI)』 【調査方法ツール】</p>	<p>A やや思う 異文化対応力の到達度合いを測るアンケートであることは理解できる。<u>学生個々の日本語スキルのレベル差異が反映されることに懸念はある。</u>が、他の研究で留学生や日本人学生対象の研究として実績があることを考えると、有効的ではないか。 が、<u>グローバルスタンダードを開示することは重要。</u></p> <p>B どちらとも言えない 学術的指標なので、授業の客観的評価ができることはメリットである。ただし、<u>調査目的や日本語の乏しい外国人であることを考慮した上で、慎重に実施内容については伝達することが求められる。</u></p>	<p>異文化対応力をこれまで測定したことがなかったため、漠然としていた学生の異文化感受性発達段階の指標を明確にできることは、本授業のみならず、学内の他の授業や課外授業、学生の生活指導などにおいても役立つデータになることが期待できると考えている。</p>

(6)その他コメント

・事前・事後テストや実施後アンケート、IDI など、質問量も多いので、留学生が疲れなようなテスト実施方法の工夫をした方が良い。また、なぜこのようなテストを実施するのが調査目的などは随時説明する必要がある。(Aさんより)

・こうした学習体験を通じて自己理解を深め、考え、前に踏み出す意欲に繋がることに期待。社会人基礎力の醸成を育む効果が期待できる。

今回のコンテンツは、新入社員研修として効果的なコンテンツではないかと思う(社内でも使えるのでは?)自身が担当する授業にも活用できそうなヒントが多くあった。途中の共同作業や最後のプレゼンテーションを通して、学習者が個々の気づきを得られそう。(学チカで企業へアピールできるエピソードなど)デジタルとアナログを上手く利用している授業である。(Bさんより)

4.1.2 実務家によるエキスパートレビューからの改善点

実務家によるエキスパートレビュー(表8)から以下の(1)学習目標(2)前提条件(3)事前テスト・事後テスト(4)Moodle教材(5)評価方法の5つについて、再度見直し・修正することとした。

(1)学習目標について

「協働力」の言葉が抽象的でかつ曖昧な表現のため、留学生にとってもわかりづらい、「協働力」とは何か?など日本語での定義づけよりも何ができているようになると良いのか、行動目標を具体的に示した方が良いのではないかと考え、学習目標を以下の文言に変更することとした。

((学習目標))

レビュー前	協働力:他者との関わりあいの中で自分の強みを活かし、他者と問題解決に向け周囲を巻き込んで働きかけることができる。
レビュー後	1 自身の強みを自己体験に沿って説明することができる。 2 異なる文化背景をもつ者と意見をまとめ、課題に対して提案することができる。

また、課題テーマ設定は、前回の設定でも良いが、旧)『商品の提案』⇒新)『商品・サービスの提案』にして、学生が自由な発想・創造力を持って提案できる課題内容に改善することとした。

(2)前提条件について

日本語レベル差異により文字だと誤解が生じる可能性があるため、前提条件を「口頭テスト」に変更し、留学生の日本語レベルに合わせ、同じテスト内容でも日本語の言い回しを変える、合格基準は明確にするなどの工夫を行う。

前提条件を下記の文言に変更する。

【前提条件】

改善前	なし
改善後	①日本と海外の就職活動や企業文化が異なることを知っている ②日本のビジネスマナーを知っており、日本の面接へ行くスーツの着こなしが実践できている。

(3) 事前テスト・事後テスト

「事前テスト」「事後テスト」は同レベルであるが、日本語スキル差による課題が残る。二人からも質問項目・評価基準に関して、もう少しやさしい日本語で解答できる工夫をするようにと共通するアドバイスをもらったので、以下の改善を行うこととした。

1. 事前テスト・事後テストを再作成

2. 日本語教師による日本語チェック

質問項目・評価基準を日本語教師の先生へ文言チェックをしてもらう

3. 事後テストの実施方法の工夫

事後テストにてスキルチェックをしてから、事前テストの結果を配布し、自分のスキルが身についたかどうかを回答させる方法に変更する。

(4) Moodle 教材について

今後も Moodle を活用することは継続することを決めた。なぜなら、また、10 以上のことは教えない工夫を行う。毎回、授業前の目次を見て授業後と教授事項が何個あるかを確認することとする。

全 5 回のスケジュールの流れについては、Moodle 教材資料での提示、対面授業時では、全体アナウンス、日本語スキルに問題がありそうな留学生数名に向け、個別対応をする工夫を行っていきたい。

Moodle 内での必須課題説明と例については、説明がくどかった箇所もある。シンプルかつ色分け・文字の大きさの工夫を行い、必須課題説明の箇所は、改善する。

(5) 評価方法・調査方法について

評価・項目内容は変更せずに、日本語の言い回しを以下 2 点の改善を行う。

1. 日本語教師による日本語チェック

項目・評価基準を日本語教師の先生へ文言チェックをしてもらい、やさしい日本語スキルが低い留学生でも評価できるように改善する。

2. 振り返りシートの修正

各回の振り返りシート「チーム内貢献度(%)」については、チーム内評価者も記入できるように加筆する。

異文化対応力をこれまで測定したことがなかったため、漠然としていた学生の異文化感受性発達段階の指標を明確にできることは、本授業のみならず、学内の他の授業や課外授業、学生の生活指導などにおいても役立つデータになることが期待できると考えた。

4.2 ID 専門家レビューによるエキスパートレビュー

実務家エキスパートレビュー後修正をした資料をもとに次は、ID 専門家レビューによるエキスパートレビューをもらうこととした。

依頼した理由は、2点ある。1点目は、本研究に関する内容に関し、助言をいただく機会があったこと、キャリアに関する授業を大学でご担当されているご経験があることや博士の学位をお持ちであることが理由である。

以上の理由から、ID 専門家としての観点からのエキスパートレビューを依頼した。

4.2.1 ID 専門家レビューによる結果

レビュー方法として、事前に資料6点(①事前テスト/前提条件記述あり②事後テスト③教材④授業後アンケート⑤異文化感受性発達度アンケート(日本語版 IDI)⑥ID 専門家レビューアンケート)の6点送信し、Google 共有フォルダを用いて、資料を共有した。

その後、(2023年11月2日(金)10:00~11:15)は、オンラインビデオ会議ツール「ZOOM」にて同期型インタビュー形式で60分間実施した。

10月日にメールにて送っていただいたアンケート回答結果をもとに「ID 専門家レビューアンケート」に沿って、回答・助言をいただきながら、進めた。

インタビューの報告は、下記のとおりである。

日時：2023年10月27日（金）

【ID 専門家レビュー アンケート】

以下の質問にご回答ください。

◆学習目標 資料1「授業教材 LESSON 1」P3参照	
本授業の学習目標は妥当だと思いますか。	やや思う
目標①で「提案ができる」としか書かれていないが、提案内容やプレゼンテーションでどの程度を求めるのか記述する必要はないのだろうか。	
学習目標に対する課題テーマ設定は妥当だと思いますか。	どちらともいえない
Mission のところに、目標②に関わるような記述があるとよい。	
◆前提条件 資料1「授業教材 LESSON 1」P3参照	
本授業の前提条件は妥当だと思いますか。	思わない
「日本のビジネスマナーを知っており」という記述が、どのような内容でどの程度を想定しているのかが、資料からは読み取ることができない。ビジネスマナーという語の指す範囲が広いので、実際のテストに对应してもう少し詳細に記述するほうが良いのではないか。	
本授業の前提テストは妥当だと思いますか。	どちらともいえない
口頭での実技チェックの方法がわからないので、妥当性を判断できない。特に、ビジネスマナーの知識をどのように測るのがわからない。例えば、「初対面の企業の担当者にお辞儀をして名刺交換し、日本語と中国語で自己紹介ができる」といったように具体的なテスト方法がわかると良い（前述の前提条件の妥当性と関連）。 また、グループワークへの意欲については、「グループワークをしてみたいですか？」と口頭で聞くだけなのだろうか。	
◆事前テスト	
事前テストは、本授業を必要とする人と必要出ない人が判別できていたか	思わない
「4.中国本土へ進出したい日系企業に向けて、商品・サービスの提案できる。」については事前テストの段階で実際に行うわけではないので、「できると思う」かどうかで判断すると思われるが、それが事前テストとして十分かはよくわからない。	
事後テストと同じレベルの問題であったか	やや思う
記述内容がほぼ同じなのでレベルは同等であると思われる。むしろ、記述がほとんど事後テストと同じ過去形だが、これで問題ないのだろうか。たとえば、「アンケート調査では、どのツールを用いましたか。」→「アンケート調査をする場合は、どのツールを使いますか。」というようにするべきでは。また、「2-1 どの授業のどんな内容を活用しましたか。」とあるが、これは第10回までの授業でインタビュー実施法やマーケティングについて学んでいる前提という理解でよいのか疑問に思った。	
◆事後テスト	

学習目標を達成できたかどうか、テストの結果から判断できたか	そう思う
学習目標を直接反映した質問内容だったか。	どちらともいえない
<p>ただし、質問 1～3 が、目標①「中国に関するスキル・知識を活用して」に対応していると思われるが、実際の授業の内容と対応しているのかわからない。</p> <p>質問 1 は、目標の「中国に関するスキル・知識を活用して」に対応しているのか良く分からない。(ツール選択で「Google フォーム」以外を記載している)ことが、中国文化や商習慣に関わるのなら OK)</p> <p>質問 2 は、インタビュー方法や、マーケティングについて既に学んでおり、それを活用した記述ができていれば OK なのかと想像した。</p>	
必要のないことが質問内容にあったか	どちらともいえない
上のコメントと同じ	
<p>◆LMS 教材 (Moodle) について</p> <p>資料 1 「授業教材 LESSON 1」P 3 参照/資料 2 Moodle 画面表示</p>	
教材の導入に教材の使い方の説明があったか	どちらともいえない
<p>「教材」は PowerPoint の投影資料を指すとすれば、「教材の使い方」とは何を指すのかが良く分からない。(クリックして閲覧するだけでは?)最後に課題の説明があった。課題の使い方の説明は、Moodle のほうに記載されていた。</p>	
一度に多くのこと (10 以上) を教えようとしていないか	どちらともいえない
<p>多くはないが、課題 2 (アイデア出し)に関する教材や説明がスライド内には何もなく、Moodle に例示はあるものの、これで十分にできるのかは分からなかった。</p> <p>※Lesson11 に限定したコメントです。</p>	
全 5 回の全体スケジュール (流れ) は示されているか	やや思う
<p>授業教材 p.4 のスケジュール内で、課題の欄には Moodle の課題番号 (LESSON11-課題 1) も記述すると対応がさらにわかりやすくなるのではないかと。</p>	
必須課題に説明と例示が示されていたか	そう思う
<p>指示が具体的で、フォーラムへの書き込み例も提示されていた。</p>	
<p>◆評価方法</p> <p>今回の PBL 型授業での評価方法に 5 つを使用しておりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションループリック評価シート ・各回の振り返りシート (自己評価・他者評価) ・事前テスト ・事後テスト ・授業後アンケート ・調査アンケート <p>⇒資料 3 「共同作業認知度尺度」・資料 4 「グローバルコンピテンシーに関する調査」</p> <p>以下のツールは、ブレンド型学習による産学連携 PBL 型授業の有効性を検証する上で妥当ですか。</p>	

※本研究において授業の有効性をどのような観点から評価しようと考えているのか (RQ) がわからないので、基本的には学習目標達成の観点からということで以下回答します。

①『プレゼンテーションループリック評価シート』	思わない
Moodle教材にあるループリックと添付資料の構成が異なるので、使い分けがよくわからなかった。学習目標では、「企業へ商品・サービスの提案ができる。」とあり、事後テストからも商品・サービスを提案した内容が記述されていれば良いと思われるので、プレゼンテーションの言語的要素や、内容、視覚的工夫を評価することは、この授業の有効性と関連が薄いと思われる。プレゼンテーションの質も成果として重要であるならば、そもそも学習目標に組み込むべき。	
②『各回の振り返りシート (自己評価・他者評価)』	そう思う
学習目標②に対応している。他者評価もあるのがよい。	
③『事前テスト』	やや思う
下の『事後テスト』のコメント参照	
④『事後テスト』	やや思う
学習目標との対応の点で、上の方で書いた懸念はあるものの、学習目標達成の観点からであれば概ね妥当である。(事前テストと事後テストを比較すると想定)	
⑤授業後アンケート	やや思う
Q2「あなたにとって、PBL型授業はどのような時に役立ちましたか。」は、回答が難しそうだった。「今後、どのような場面で役立ちそうですか」を尋ねる必要はないのか。全体に自由記述が多いので、学習者の日本語レベル的に回答が大変ではないのかという懸念あり。余談だが、質的分析をどのようにするつもりなのかは考えておく方が良いと思う。	
⑥-1 資料3「共同作業認知尺度」	やや思う
「協同学習を上手く進めるための工夫ができる」という学習目標には直結していないが、学習者の協同学習に対する認知を測るという意味では興味深い。余談だが、尺度は3因子らしいので、「協同効用」が高い傾向が出ればよいということだろうか。また、これを測定するならば事前事後での変化が分かると良いと思う。	
⑥-2 資料4「グローバルコンピテンシーに関する調査」	やや思う
授業の学習目標とは異なるが、本研究が中国語活用人材のグローバルコンピテンシーを高めることを目的としているのであれば、妥当である。こちらも事前事後で変化を見るのだろうか。	
◆その他 お気づきな点や改善点などあればお聞かせください。	
形成的評価にあたって、本研究の概要や目的の説明があると良いです。また、授業の対象 (何年次か、これまでどのような学習をしているのか)、本授業の位置づけ、Lesson1~10の内容も参考資料として欲しいです。	

お忙しいところ、ご協力いただき、ありがとうございました。

図 12 ID 専門家レビューアンケート結果

4.2.2 ID 専門家レビューからの改善点

ID専門家レビュー(図12)を受け、改善点を大きく3つに分けて改善することとした。

- ◆改善点1:「学習目標の改善」
- ◆改善点2:「授業実施後アンケートの改善」
- ◆改善点3:改善点3:事前・事後テストの修正

◆改善点1:「学習目標の改善」

ID専門家レビューのフィードバックでは、そもそも何を活用して何ができるようになるか良いのかが不明であるとの指摘をいただいた。

「大学で学んできた中国語や中国に関するスキル・知識」はどんなスキル・知識を指すのかももう少し具体的・明確にすること、「企業へ商品・サービスを提案ができる」とは、そもそもプレゼンスキルを上げること、フリーライダーを無くしたいこと、提案内容をより良い改善をすることの何が目的なのか、わからない。」

⇨これらのアドバイスを受け、改善として学習目標を以下の3つに定めることとした。

学習目標①	大学で学んできた中国語のスキル(聴く・話す・読む・書く・入力する)や中国情勢など事例を交えて説明できる。
学習目標②	PREP法やホールパート法を使って、相手に説明する事ができる。
学習目標③	異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。

そもそも、本授業のねらいとして、従来のキャリア授業では就職(=就社)するための面接対策や就職活動に関する知識、履歴書の書き方などインプット中心で教えがちな傾向がある。

しかしながら、就社することが目的ではなく本授業では、グローバルに国籍問わずどんな業界でも産業人として上手く社内外の人々と円滑に業務を進めていくスキルを身につけることで、結局は、就職活動におけるスキルは身につくと考えているからである。

そこで、学習目標をこれまで3つ個別に考えていたものを3つとも関連性を持たせた内容に再考してみることにした。

まず、なぜ本研究で扱う産学連携授業を実施したいのか？という問いに対して、グローバル社会の中で働く上では、国籍や文化が異なる人々が、互いの価値観を認め合い、対等な関係で課題解決に向けて、具体的な手立てを提示しながら、アクションし、円滑に進めていくことが重要であり、ここが本研究でのメインとなる学習目標であると考えている。

大学生活において、彼らは同じ学問に興味を持った学部・学科のクラスメイト、共通の趣味・興味を持ったサークル仲間やアルバイト仲間など同世代もしくは近い世代かつ共通点や共感できる価値観を持った友人達といった群れの中で生活をしている。留学生達も同じ国籍を持つ者同士のコミュニティの中で生業が成立してしまっていることも少なくない。

しかしながら、企業においては、異なる世代、価値観・これまでの経験値など全く異なる集団という企業の中で、お互いに関わり合いながら、成果を出していかないといけない。

学生たちが本研究で扱う協同学習を通じて、異なる文化背景を持つ者同士普段交わり得ない者同士がグループ構成の中で、グループ内で必然的に起こりうる衝突をすする過程での行動経験を通して、お互い譲歩しながらも、円滑に同じ目標に向かって協力し合うことを学び、自己・他者評価による相互評価を行いながら、成長していくことが重要であると考えます。

次に、本大学の学習の土台は、「中国語」である。中国語の「聴く・話す・読む・書く・入力する」というスキルの習得と現代の中国の文化、政治、経済、思想、情勢などの知識の習得である。異なる文化背景を持つ者同士である学生にとって、共通言語となる中国語と中国に関する国情を活用して、課題に取り組むことで必要である。

また、ここでいう「説明する」とは、PBL型授業の特徴であるアンケート・インタビュー調査、成果物のプレゼンテーションを行うことに限定される。

異なる国籍を持つ者同士である学生、特に留学生の日本語スキルは、N1～N3とばらつきが見られる。さらに日本人学生にとって、やさしい日本語で、どんな人々にも分かりやすく発表やグループディスカッション時にも相手へ自分の意見をわかりやすく伝えることが求められていると考えている。

PREP法やホールパート法を活用できることで、自分の考えや相手の発言を要約し伝えることで、論理的に説明できるスキルが身につく、日本語スキルの大きな差異がある

留学生達と日本人学生間でのコミュニケーションで生じていたミスリードによる誤解を回避させ、相手の行動に対して、相互理解の促進につながる手立てとして、PREP法やホールパート法を用いてロジカルに相手へ意思疎通を促すことが重要であると考え

◆改善点2「授業実施後アンケートの改善」

「単純に自由記述が多い点が学生の日本語レベルが異なるならば回答が大変ではないかという懸念がある。特に「Q2あなたにとってPBL型授業はどのような時に役立ちましたか」という回答が難しそう。学習目標に沿った質問項目にした方が良い。実施後アンケート後にインタビューを数人からもらえると尚良い。」

これらのアドバイスを受け、授業実施後アンケートについては、質問項目の見直しをすることにする。

質問項目は以下の10個の内容にし、Q1～Q7で4段階の評価項目にし、自由記述はQ7～Q10で自由記述させることとした。

質問内容は、以下の項目とした。

Q1では、ARCSモデルに基づき、1)注意:Attention 2)関連性:Relevance 3)自信:Confidence 4)満足感:Satisfaction に関する質問を行い、Q2では、学習目標に対する質問、Q3ではNPS(ネットプロモータースコア)に対する質問を行い、Q4～Q6に関しては、学習目標を今後の就職活動や卒業後の企業でどう活かしていきたいか「カークパトリック4段階評価レベル2」である行動変容を問う質問とした。

Q7～Q10に関しては、自由記述による回答として、Q7は協同学習でのディスカッションに対する有益性に関する質問や授業の良い点や難しかった点・やりづらかった点・改善点を聞いてみることとした。

◆改善点3:事前・事後テストの修正

学習目標の修正に伴い、事前事後テストの修正を行なった。

ID専門家レビューにおいて、「中国本土へ進出したい日系企業に向けて、商品・サービスの提案ができる」について、事前・事後テスト(資料1:ID専門家レビュー時事前・事後テスト)の段階で実際に行うわけではないので、できると思うかどうかで判断することが十分かどうか分からない」というコメントを受けて、学習目標に沿ったチェックリ

スト形式で「事前テスト」・「事後テスト」を作成し直した(資料2:ID専門家レビュー後の事前・事後テスト)。

評価者である教員双方ができたかどうかエビデンスを持って判断できるような質問内容に変更しなくては行けないと考え、学習目標に沿った質問に変更し、記述式や実技チェックによる事前・事後テスト(資料3:形成的評価時の事前・事後テスト)に変更することとした

また、ID専門家レビューにおいて、最終回の「提案報告会」でのプレゼンテーションは、当初先行研究(福井・2016)の「表_4 評価用ルーブリック」をチェックリスト化した改良版「プレゼンテーション ルーブリック評価」を用意したが、そもそもプレゼンテーションスキルを身につけることが学習目的ではないこと、プレゼンテーションスキルの中でもさらに細分化した「PREP法やホールパート法を使って、相手に説明する事ができる。」ことを学習目標に設定していることから、「プレゼンテーションスキルのためのルーブリック評価」は、今回評価方法からは、削除することとした。

5. 形成的評価

5.1 小集団評価の実施

本研究で扱う産学連携 PBL 型授業を学習者と同じ前提条件を合格した本学1年次7名と2年次1名の計8名に対して、協力を依頼した。

理由としては、同大学の学生であり中国語スキルが対象学年に相当する中国語をすでに入学前から学習歴があったこと、本授業の履修者ではないこと、(筆者が授業評価する対象者ではないこと)、すでに数社のインターンシップや企業説明会を経験していることが挙げられる。

1グループあたり4名構成で日本人学生3名・留学生1名の構成とした。

Aグループ:日本人学生3名・モンゴル学生1名

Bグループ:日本人学生3名・韓国学生1名

授業は、対面授業と Moodle を用いて、第1回～第5回までを下記スケジュールでブレンド型学習による産学連携 PBL 型授業を行った。(表10)

最終回(第5回)では、企業役として、中国語活用人材紹介会社で就業する実践校OB(入社3年目)に協力を依頼した。

表10 形成的評価の実施内容

回	日時	内容	必須課題(★チーム ◆個人)
1	2023.11.20 12:15- 13:10	ミッション確認・グループ結成 情報集約・ニーズ分析とは	★チーム結成シート・グランドルールの 提出(Moodle/LESSON1【課題1】) ◆商品のアイデア出し (Moodle/LESSON1【課題2】)
2	2023.11.22 12:15- 13:10	ビジネスプランの立て方 効果的なプレゼンとは	★ニーズ分析調査方法 (Moodle/LESSON2【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON2【課題2】)
3	2023.11.29 12:15- 13:10	中国ビジネス展開する上で気 をつけたいこと～無印良品の 判決事例から考える。	★提案書(仮)PPT (Moodle/LESSON3【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON3【課題2】)
4	2023.12.6 12:15- 13:10	プレゼンテーションリハーサル	★提案書(本番)PPT (Moodle/LESSON4【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON4【課題2】)
5	2023.12.9 10:00- 11:30	プレゼンテーション発表 (期末試験)※企業(OB)から フィードバック	◆リフレクション(振り返り)シート (Moodle/LESSON5【課題】)

実際に90分授業を確保することは個々のスケジュール上難しいと判断し、お昼時間(約60分間)に授業を行い、本来授業で行う1週間を振り返りシートを記入し、相互評価・フィードバック・時間管理調整については、各自グループに任せ報告を休み時間や空き時間にもらい、その都度次の授業を実施する前に報告・ワークシートの提出を行った。また、ディスカッションとシェアリングの時間を30分に短縮した。

5.2 調査方法

各々の学習目標に達成したかどうかについては、事前テスト・事後テストによる点数の変化により、学習目標の到達度を検証する。

また、本研究で協同作業の認識を測定するためには、長濱・安永・関田・甲原(2009)により開発された「共同作業認識尺度」を用いて、協同作業に関する授業実施前後による認識の変化があるかを測定する。

さらに、授業実施後、学生には、「実施後アンケート」に回答してもらい、日を改めて対面でアンケート結果に基づき、インタビューを行った。また、第5回の「提案報告会」の企業役となった本学卒業生 OB にも「企業向け実施後アンケート」に回答をもらい、直後にインタビューを実施した。

5.3 実施結果

5.3.1 学生の事前テスト・事後テスト結果

3つの学習目標の到達度を測定するために、授業前に「事前テスト」、授業実施後に「事後テスト」を行なった。結果は、事前テストの平均点が 22.13 点(最高点 39 点/最低点 10 点)、事後テストの平均点が 93.13 点(最高点 96 点/最低点 80 点)という結果となり、全体的に平均点・最高点・最低点は全て上昇している。また、8名全員が「事後テスト」の結果、合格基準点を満たす結果となった。

学習目標1「大学で学んできた中国語のスキル(聴く・話す・読む・書く・入力する)や中国情勢など事例を交えて説明できる。」に関しては、中国本土で使えないアンケートツールや使用できるアンケートツール、中国語で質問の作文や日本語訳はできていた。しかしながら、アンケート回答結果からのグラフ化に関しては、実際に事後テストで作成した経験者は解答していたが、グラフの作成をグループワーク時に経験できなかった学生3名が、「習得できていない」と回答した。また、中国本土へ日系企業が進出した失敗事例を説明する項目に関しては、事後テストでは、全員が授業で行なった企業名や中国と日本で異なる商標権や法令の違いなどの記述が見られた。

学習目標2「PREP 法やホールパート法を使って、相手に説明する事ができる。」においては、PREP 法とホールパート法で話すスキルを、チェックリストに基づき、実技テストでチェックを行った。事前テストでは、2つの手法の言葉の意味も知らなかった学生達であったが、事後テストでは、15 点満点中 PREP 法で話すことは、平均点 13.63、ホー

ルパート法で話すことは平均点13.88と、スキル習得が向上していることが顕著に見られた。チェック項目での減点要因として、「顔の表情が豊かであったか」「身振り手振りで話せたか」のいずれかのチェック項目で減点された学生が4名でいた。

学習目標3のグループワーク時の対応に関しては、「態度」に関する質問を行なったが、具体的な行動の工夫点の記述がみられた。また、最後の質問で事前・事後同じ質問として「グループワークにおいて達成感を味わう経験の有無」を聞いたところ、事前テストでは、「達成感を味わう経験をしたことがある」と回答したのが、3名であるのに対し、事後テストでは、8名全員が「達成感を味わう経験をしたことがある」と回答した。

しかしながら、到達度がこれだけでは、説明が明確ではないため、「協同作業認識尺度」の「協同効用因子」に着目し、協同作業の認識に変化があるかを測定した結果や実施後アンケート結果で検討する。

表11 事前・事後テストの結果比較 (n=8)

	質問項目	事前		事後	
		平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
学習目標1	Q1 中国で使用できないアンケートツールについて(5点)	1.88	2.59	5.00	0.00
	Q2 中国で使用できないアンケートツールの質問項目・回答に対する中国語作文・日本語翻訳(10点)	2.25	3.11	8.75	1.83
	Q3. 中国本土へ日系企業が進出する上で気をつけること(5点)	0.00	0.00	5.00	0.00
	Q4. 中国本土へ日系企業が進出した失敗事例(10点)	1.25	3.54	10.00	0.00
学習目標2	Q1PREP法を用いて3分以内でテーマに沿った話をする(実技試験・15点)	0.88	1.64	13.63	2.07
	Q2 ホールパート法を用いて3分以内でテーマに沿った話をする(実技試験・15点)	0.50	1.07	13.88	1.73
学習目標3	Q1グループメンバーの遅刻や欠席時の対応(5点)	4.13	1.81	5.00	0.00
	Q2 グループワークの提案時の対応(5点)	1.88	2.23	4.50	0.93
	Q3 フリーライダーへの対応(5点)	0.38	1.06	4.13	0.99
	Q4 反対意見に対する対応(5点)	2.13	1.89	4.75	0.71

Q5一人に業務が偏っている時の対応(5点)	1.88	1.81	4.75	0.71
Q6グループ結成時、グループ内で決めること(10点)	3.13	2.59	8.75	2.31
Q7達成感を味わえたか(5点)	1.88	2.59	5.00	0.00
	22.13	11.32	93.13	5.41

事前テストの平均点と事後テストの平均点差による統計的有意性を確かめるために、有意水準 5%で t 検定(両側)を行ったところ、 $t(12) = 5.007, p < .01$ であり、事前テスト・事後テストの平均点差は有意であることがわかった。

5.3.2 学生の実施後アンケート結果

授業を全て終了した段階で、今後の授業改善のために、「授業実施後アンケート」を行なった。結果は、以下のとおりである。

Q1 では、鈴木(2002)の「資料7教材改善に役立つケラーの ARCS モデル～学びへの意欲を4つに分けて考える～」P176を参考に、注意(Attention)、関連性(Relevance)、自信(C Confidence)、満足感(Satisfaction)の4項目を4件法による4段階尺度で行なった。

結果は、以下のとおりである。

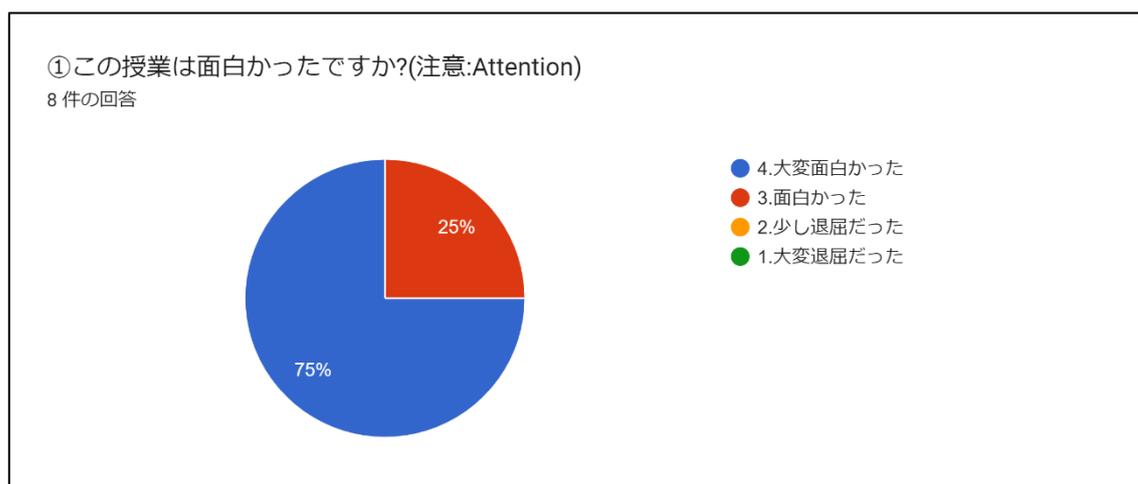


図13 面白さ(注意:Attention)の回答結果

「この授業は面白かったですか?(注意:Attention)」という質問に対し、「4:大変面白かった」と回答したのが6名、「3面白かった」と回答したのが2名であった。(図13)

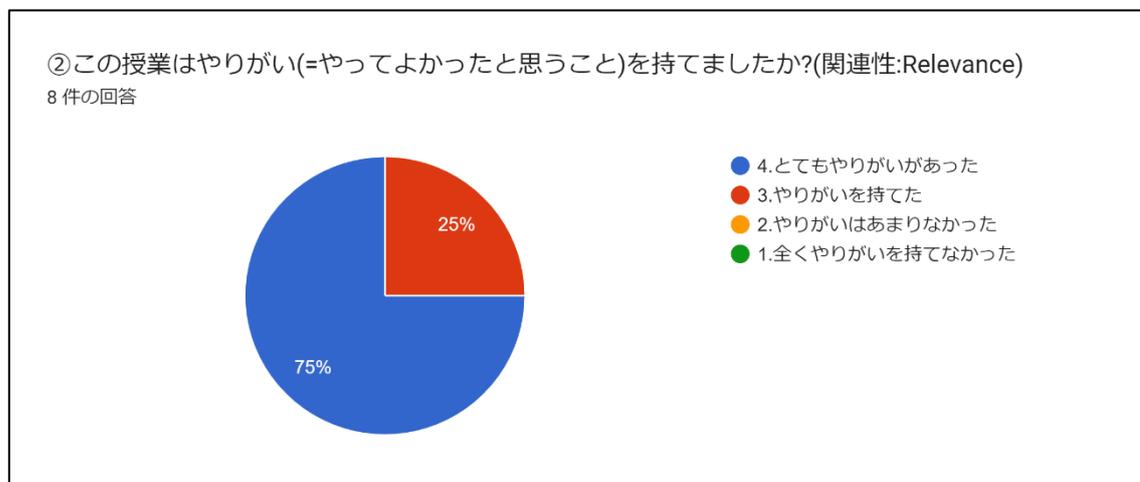


図14 やりがい(関連性:Relevance)の回答結果

「この授業はやりがいを持ってましたか?(関連性:Relevance)」という質問に対しては、最も多かったのが、「4:とてもやりがいがあった」が6名、「3:やりがいを持てた」が2名であった。(図14)

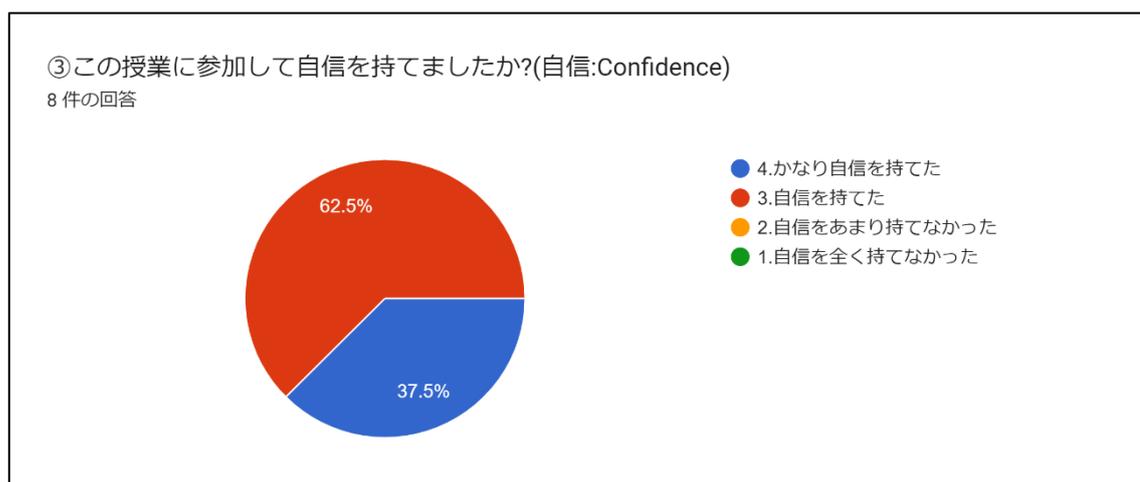


図15 自信(自信:Confidence)の回答結果

「この授業に参加して自信を持ってましたか?(自信:Confidence)」という質問に対しては、最も多かったのが、「3. 自信を持てた」が5名、「4:かなり自信を持てた」が3名であった。(図15)

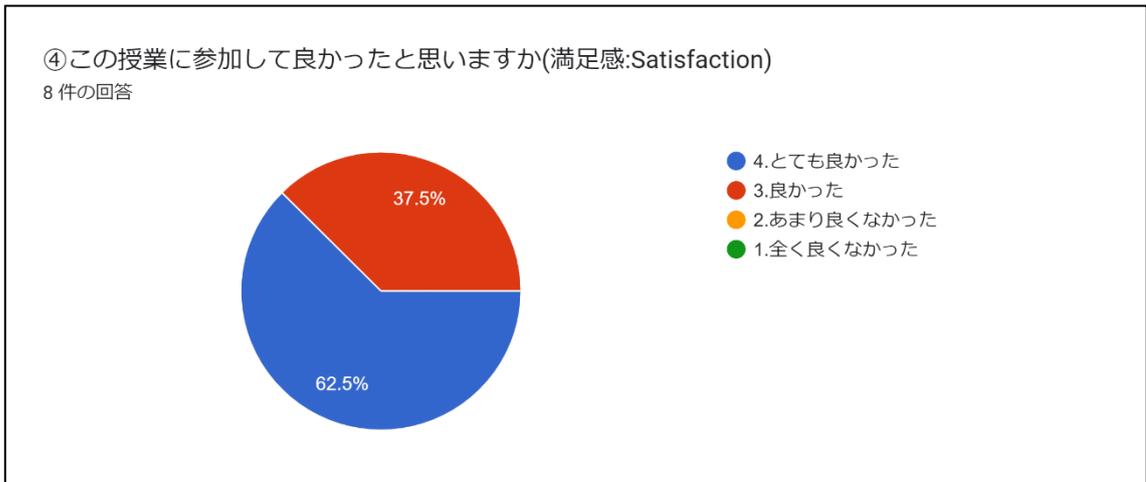


図16 満足感(Satisfaction)の回答結果

「この授業に参加して良かったと思いますか(満足感:Satisfaction)」という質問に対し、「4:とても良かった」が5名と多く、「3:良かった」が3名であった。(図16)

次に、Q2 では、3つの学習目標の到達度に関して、「4:とても身についた」「3:身についた」「2:あまり身につけていない」「1:全く身につけていない」という4件法による4段階尺度に回答してもらった。

結果は、以下のとおりである。

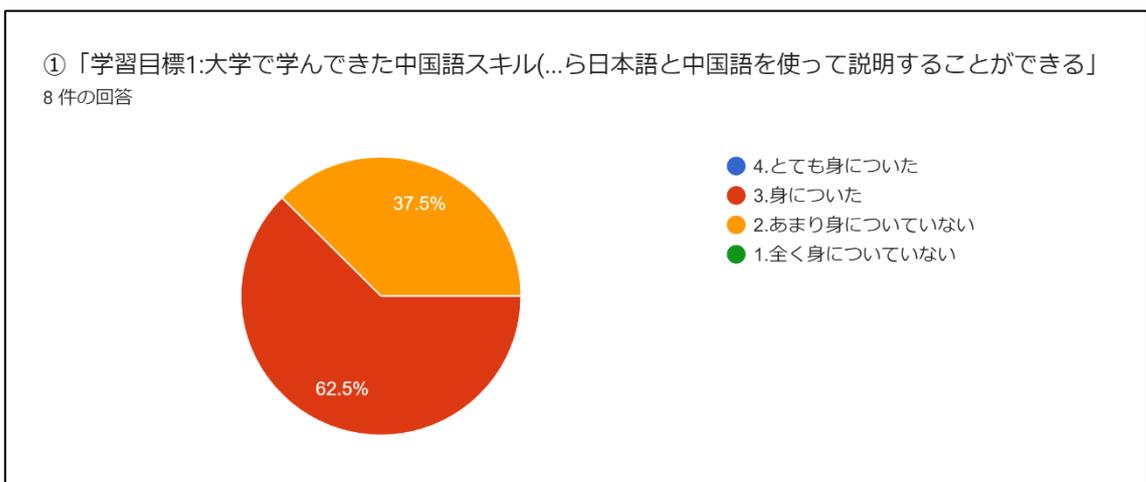


図17 学習目標1到達度 自己評価の回答結果

「学習目標 1:大学で学んできた中国語スキル(話す・書く・聞く・文字入力)や中国情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる」に対する自己評価をきいてみたところ、「3:身についた」が最も多く5名であり、次に「2:あまり身につけていない」が3名であった。(図17)

また、「2:あまり身につけていない」と回答した学生に、理由を聞いてみたところ、アンケートの依頼はしたが、アンケートの質問項目を考えただけで作文や質問項目入力は経験できなかったことやみんなで力を合わせれば、出来るが自分一人ではまだ出来る自信がないと話していた。

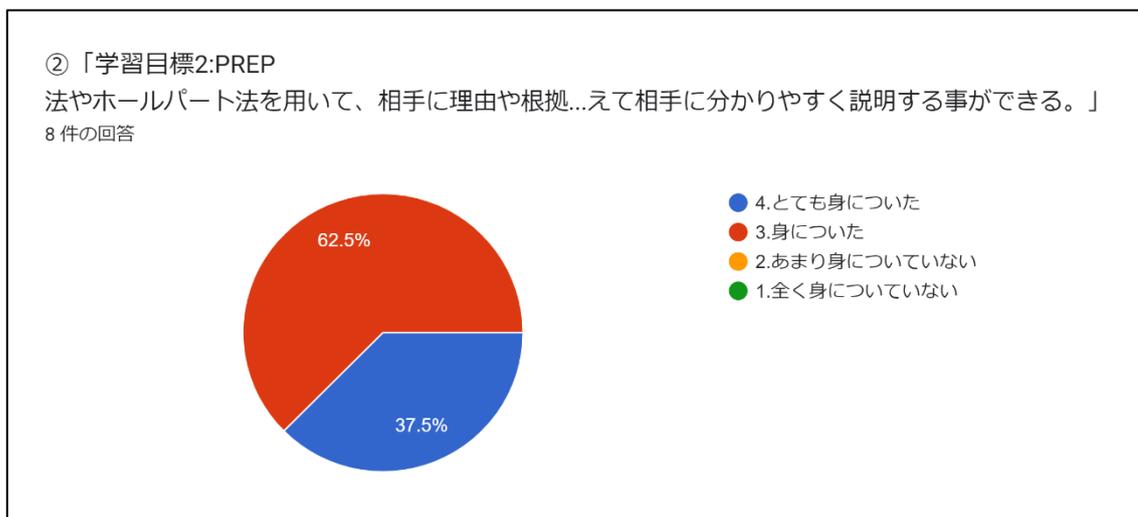


図18 学習目標 2 到達度 自己評価の回答結果

「学習目標 2:PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。」に対する自己評価を聞いてみると、「3:身についた」が最も多く5名であり、次が「4:とても身についた」が3名であった。(図18)

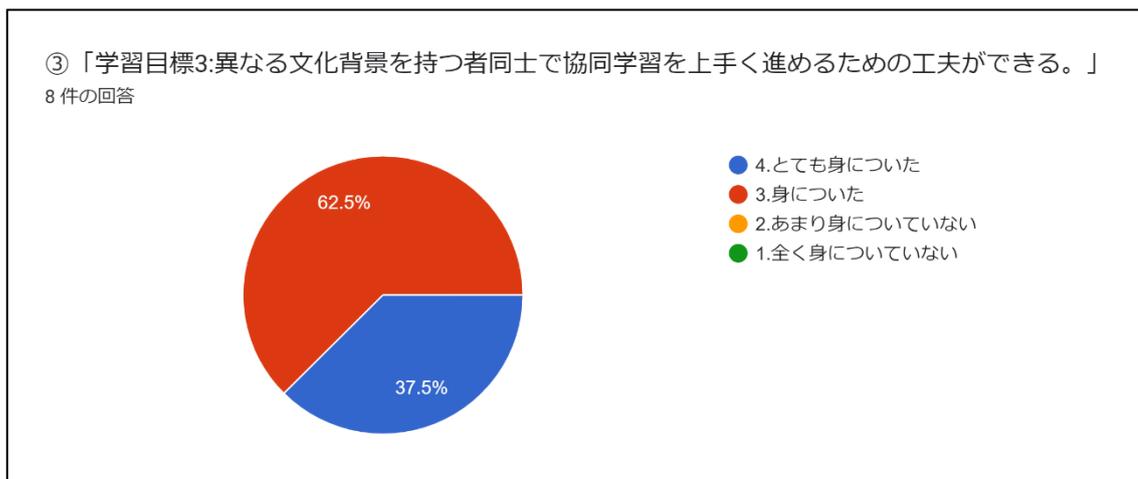


図19 学習目標 3 到達度 自己評価の回答結果

「学習目標 3:異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。」に対する質問に対しては、「3:身についた」が5名で最も多く、「4:とても身についた」が3名であった。(図19)

以上のことから、全体的に身についたが、自信を持って大いに身についたと言えるわけではないが、身につけていることは実感できている学生が多いことがわかった。しかしながら、中国語スキルに関しては、「あまり身についていない」という回答もあったことから、授業改善として1人1人が中国語をアウトプットできる機会を増やす学習設計の改善が必要である。

Q3では、「この授業を後輩達へ薦めたいと思うか」という学習者の満足度と身近な存在である後輩が受講するならば、薦めたいかを「4:とても思う」「3:思う」「2:あまり思わない」「1:全く思わない」という4件法による4段階尺度に回答してもらった。結果は、以下のとおりであった。

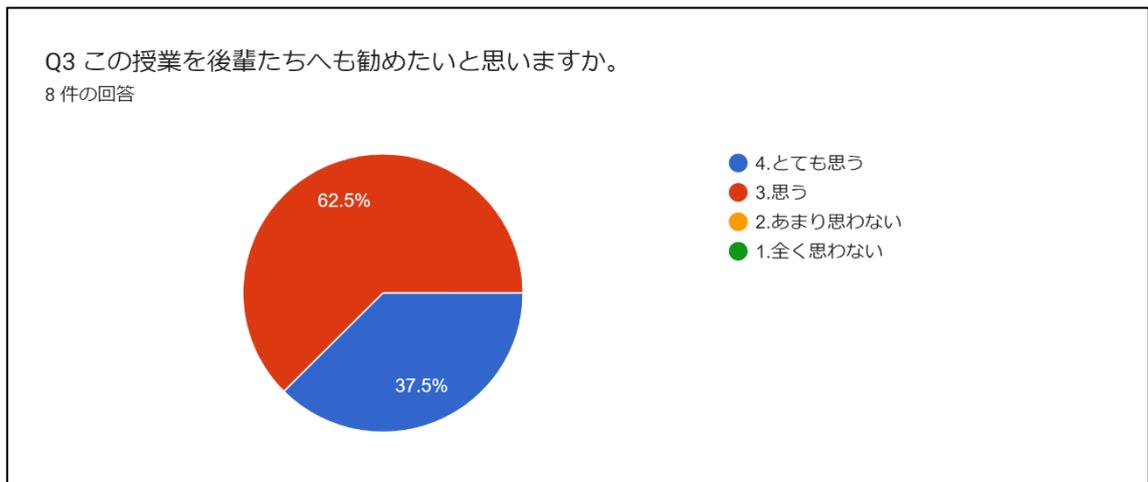


図20 後輩への推奨度の回答結果

Q3 この授業を後輩たちへも勧めたいかという質問に対し、「3:思う」が5名と最も多く、「4:とても思う」は3名であった。(図20)

本授業は必修科目であることから、学習への意欲度の差異がある本学学生達にとって、積極的に取り組んでくれる学生と受け身で取り組む学生がいそいだというコメントをもらうことができた。

Q4～Q7に関しては、授業で身につけた3つの学習目標を今後の就職活動や卒業後の企業で活かしていきたいかを、「4:とても思う」「3:思う」「2:あまり思わない」「1:全く思わない」という4件法による4段階尺度に回答してもらった。

結果は、以下のとおりであった。

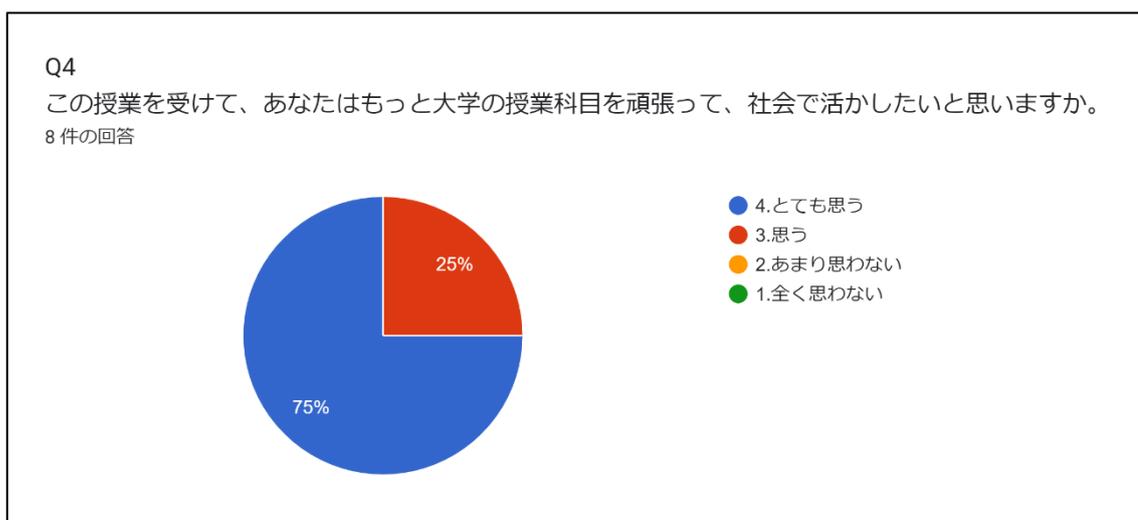


図 21 他科目に対する意欲度の回答結果

「授業後、もっと大学の授業科目を頑張って、社会で活かしたい」に対しては、「4:とても思う」が6名に対して、「3:思う」が2名であった。

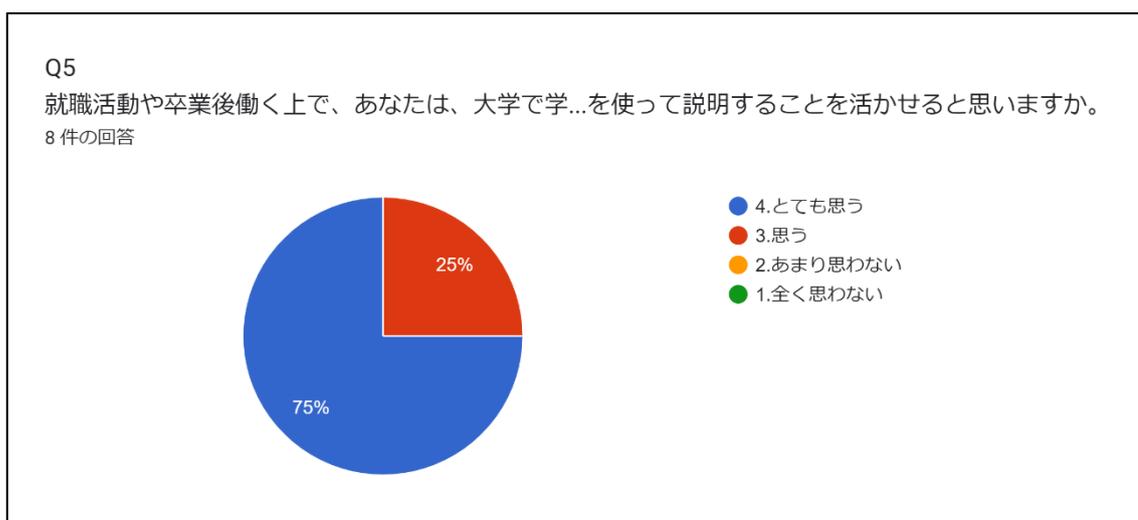


図22 大学で学んだ知識・スキルに対する社会活用度合の回答結果

「学習目標 1:大学で学んできた中国語スキル(話す・書く・聞く・文字入力)や中国情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる」に対しては、「4:とても思う」が最も多く6名であり、次に「3:思う」が2名であった。(図22)

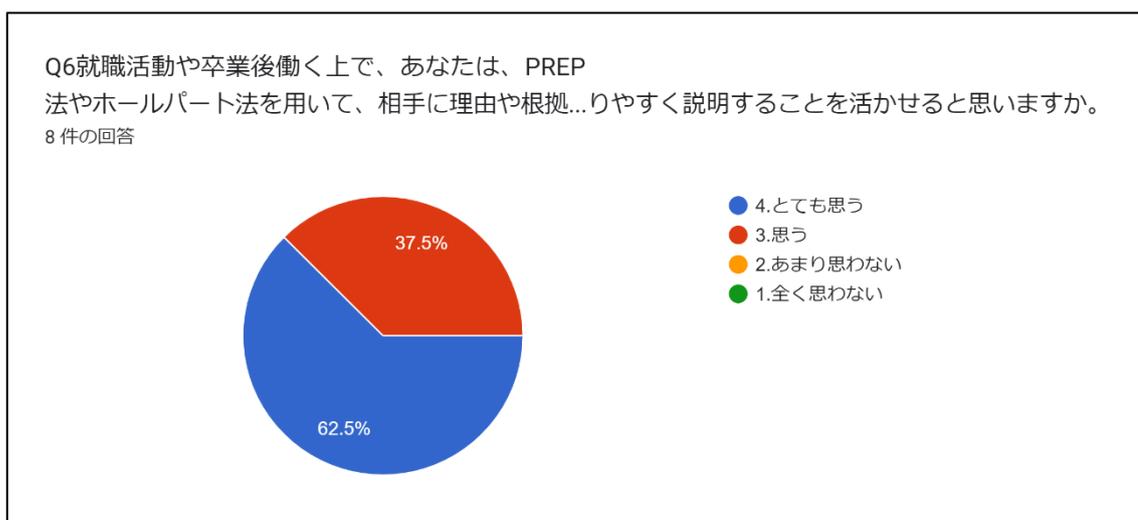


図23 学習目標1の社会活用度合の回答結果

「学習目標 2:PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。」に対しては、「4:とても思う」が最も多く5名であり、次に「3:思う」が3名であった。(図23)

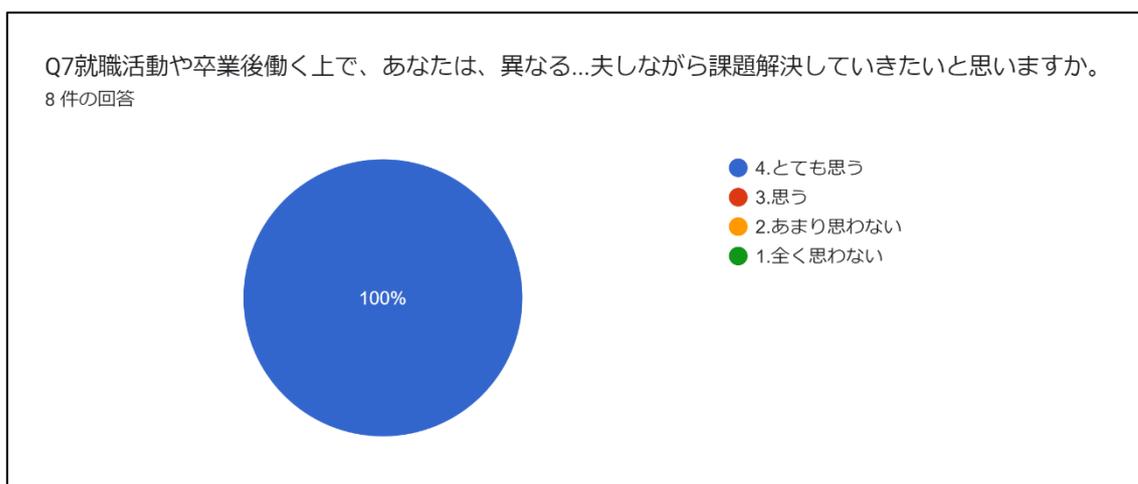


図24 学習目標2の社会活用度合の回答結果

「学習目標 3:異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。」に対しては、全員が「4:とても思う」と回答しており、特に学習目標3は、卒業後も重要であるとする学生が目立つことがわかった。(図24)

Q8に関しては、授業や授業外活動でディスカッションしあうことが有益であったかを「4:とても思う」「3:思う」「2:あまり思わない」「1:全く思わない」という4件法による4段階尺度による回答と自由記述の両方で回答してもらった。その結果、全員が「4:とても思う」と回答。(図25)

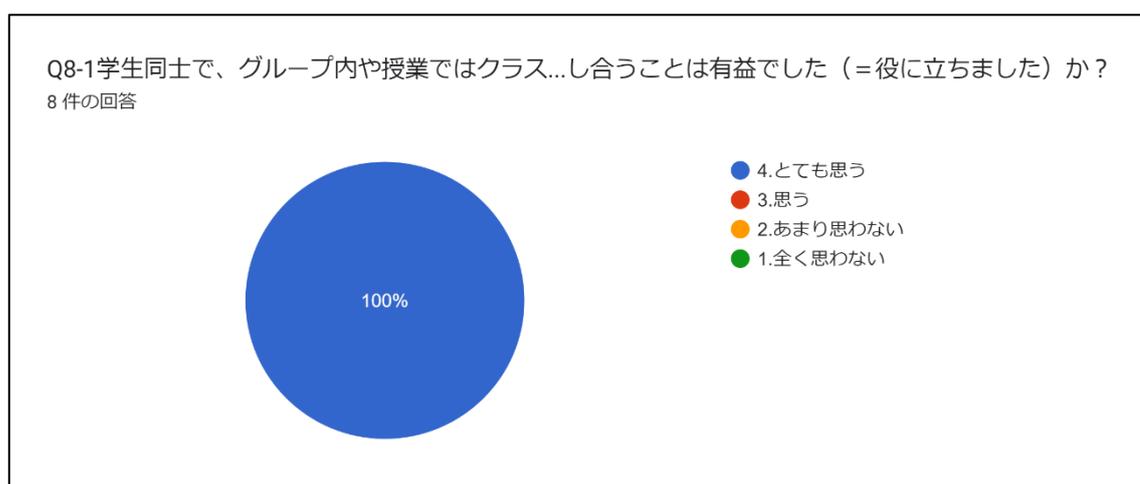


図25 ディスカッションにおける有益性の回答結果

《自由記述》

- ・他の人との認識の違いをはっきり理解することができた。自分と他人は必ず同じじゃない。
- ・色々な意見を聞いて自分には無い考えを得ることができた。
- ・さまざまな意見を聞いて、知ることができた。メンバーの意見から視野を広げられるところ
- ・自分の至らない点に気づけた。
- ・反対意見でも皆がそれぞれ自分の意見を出してくれる
- ・他のメンバーがどう考えているのかが知れて視野が広がった。
- ・同じテーマでも違う意見だったりするので、相手の考えを知って、もっと自分も深く考えられた。
- ・仲良くなることができた。日本語のスキルをもっと良くなった。他の人の意見を聞いたり、ディスカッションできるようになったと思います。

インタビューでは、さらに以下の補足コメントがあった。

《補足コメント》

・グループ活動当初は、ディスカッションで日本人学生同士の言い合いになかなかついていくことができず、疎外感を感じていた。しかし、徐々に日本語が聞き取れるようになった。普段日本語の授業や先生方は留学生に伝わるやさしい日本語を使うが、今回のディスカッションやプレゼンテーションで、日本人が日常的に使う日本語にふれることができたので、日本語のスピーキングとヒアリングのスキルが上がったことを実感でき、自信を持てるようになった。

Q9に関しては、授業での良かった点を自由記述により回答してもらった。

以下の回答があった。

《自由記述》

- ・実際に企業様の前でプレゼンテーションを行えたこと
- ・ディスカッションを重ねてアイデアを出して作り上げられたことがよかった。
- ・PREP法とホールパート法で話せるようになった。
- ・中国語を使って、アンケートを取る機会があって良かった。
- ・チームで協力して1つのものを作り上げるという経験ができた。

インタビューでは、さらに以下の補足コメントがあった。

《補足コメント》

・普段企業の方と話す機会なんてなかったが、この授業を通して免疫がついた。そのおかげで、早速企業説明会へ参加するなど将来に向けて積極性を持つことができた。

・授業後、他の企業にも興味を持ち企業説明会へ参加した。企業の方が説明をしてくれていたが、どの手法で話をしているか見分けられるようになった。また、参加前に企業に関する事前調査から疑問を持つ癖がついた。質問に対して臆することなく、ホールパート法を使って発問してみることができ、この授業のスキルが、今後も活かされることを実感できた。

授業を受けた対象学生のうち、授業後主体的に企業説明会へ参加した学生が3名おり、自らの就職活動の中で、PREP法やホールパート法を使って話すことを日常から始

めていること、企業と会う前には、事前調査をすることの行動変容など学習目標1・2を意識して行動を起こしてみたという事後報告をもらうことができた。

Q10では、この授業でのやりづらかった点・改善点を自由記述により回答してもらった。

《自由記述》

- ・とにかく時間がなかつたので、スピード感が求められたこと
- ・どのように作ればプレゼンがわかりやすいか、話し方
- ・準備期間が短かつたことが大変だと思った。
- ・時間がなかつた点
- ・準備期間が少し短かつた。時間がなかつた
- ・ビジネスの視点で考えたときに、損益についてあまり話し合いができなかつた。もう少し調査が必要だつたと思いました。
- ・中国の法律について調べるのが難かつた。
- ・授業に遅れた時や欠席した時のペースがむずかしかつたが、グループのみんなが手伝ってくれたのはうれしくて、ここまでできたのだとおもいます。

インタビューでは、さらに以下の補足コメントがあつた。

《補足コメント》

- ・とにかく時間がなかつた。アンケート調査後、報告書を作成する中でアンケートを別の切り口から調査したいと何度か思った。一度アンケート調査実施後、中間報告として、発表資料をまとめてみて再度アンケート調査を行いたい。そのためにも 5回の授業は短いと感じた。
- ・「損益分岐点」という言葉は初めて聞いた。改めて中国語学習の習得だけでは社会では通用しないことがわかつた。企業で働く上で必要最低限の経営・会計に関する知識は今後勉強しておかないといけないと思う。
- ・資料の作成や中国に向けたアンケート作成などを責任感のあるグループメンバーに任せてしまった。「自分も手伝うよ」と試みたが、「自分がやるから大丈夫」と言われてしまい、協力したくてもできない状況が心残りであり、やってもらつたメンバーに罪悪感を持ってしまった。役割を決めて動くのもいいが、役割交換の機会も授業にあるともつと他の役割も経験できるので、自分が身につけるスキルもできたと思う。

今回授業の改善点で特に時間がなかったこと、アンケートの再調査をしたかったとの意見が多かった。これは、裏を返すと学生達がもっと時間をかけて本腰を入れて、本研究の授業に取り組みたい熱意・学習に対する探究心がでた証であると考えている。全5回の授業では、確かにアンケート調査期間はわずか3日～1週間と短期間になってしまう。そのため、学生達にとっても失敗したと感じ、不完全燃焼のまま報告資料の作成に取り組まなくてはならない状況となってしまう。これは、授業の回数に関しては、再度見直し、改善しなくてはならない。

今回の授業では、フリーライダーが出ないことを目的としていたが、協力したくてもできない状況があった。今回の事例では、1チームがGoogleスライドを使用し、手分けして分業体制ができていたが、もう1チームは、PCを持っている学生のみがスライドやアンケートの作成を行っていたことが学生とのインタビューでわかった。作業に対する負担を平等にできる学習環境の改善が必要であることがわかった。

5.3.3 学生の「協同作業認識尺度」の事前・事後調査結果

参加学生に対して、協同作業の認識に変化があるかを測定するために、授業実施前第1回目の授業開始前と第5回終了後において、長濱・安永・関田・甲原(2009)により開発された「共同作業認識尺度」を用いた。これらは、「協同効用」「互惠懸念」「個人志向」の3つの下位尺度、18項目の質問項目で構成される。「5:とてもそう思う」「4:どちらかといえばそう思う」「3:どちらともいえない」「2:どちらかといえば思わない」「1:全くそう思わない」という5件法による5段階尺度で回答してもらった。

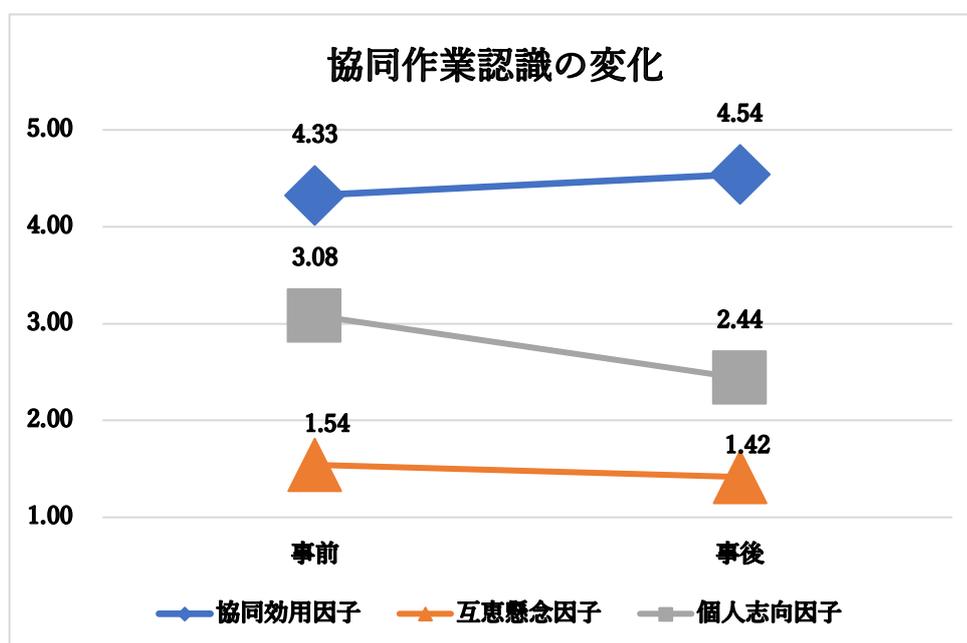


図26 協同作業認識の変化

授業実施前と実施後における「協同効用」「互惠懸念」「個人志向」について対応のあるt検定を行った。「協同効用」に関しては、事前事後間において有意差による上昇がみられた($t=2.75, df=8, P<.024$)。「互惠懸念」に関しては、若干ではあるが有意差による低下がみられ($t=-1, df=2, P<.422$)、「個人志向」においても有意差による低下がみられた($t=-3.03, df=5, P<.028$)。(図26)

5.3.4 企業の実施後アンケート結果

企業役の卒業生OBによる企業の実施後アンケート結果およびインタビューから以下の回答をもらうことができた。

Q1: 今回の学生たちの発表に対する満足度

4. 大変良かった

Q2: 今回の発表テーマは、現実的にビジネス現場で起こり得るテーマの内容か？

4. とても現実的に起こり得る

Q3: 今回の発表テーマの難易度

4. 最適であった

Q4 .本授業では、3つの学習目標の到達度について

①「学習目標 1: 大学で学んできた中国語スキル(話す・書く・聞く・文字入力)や中国情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる」

4. とても身につけている

②「学習目標 2: PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。」

4. とても身につけている

③「学習目標 3: 異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。」

4. とても身につけている

Q5 このような産学連携授業の取り組みの次回以降の継続について

4. とても思う

Q6 今回の取り組みにおいて本学学生の印象について

《自由記述》

・事前準備がしっかりなされたという好印象を受けた。

《補足コメント》

前回、リハーサル時に共有フォルダ内でアドバイスしてきたことをしっかりブラッシュアップしてきていることが分かった。具体的に調べることを指示したわけではなく、質問をただけだが、こちらが要求した以上の仕上がりで驚いた。今後も彼らの成長が楽しみである。

Q7 この発表の良かった点について

《自由記述》

・内容について: ビジネスとしての可能性を感じさせるテーマや発表内容であった。

・姿勢について: 原稿を見るわけではなく、聞き手に寄り添った発表の仕方だった。

《補足コメント》

特に、ガチャガチャのビジネスの提案は、いかに人件費を抑えて企業 PR できるかという発想は面白かった。

中国語で作成されたアンケートも見たが、業務上、同様の市場調査を行うが、中国語のレベルとして、現段階のスキルでも問題はない仕上がり具合であった。

聞き手としても、論理立てた説明であったため、とても聞きやすかった。

Q8 この発表の改善点について

《自由記述》

・ビジネスとしての根拠づけ、費用計算がもう一步踏み込めれば、よりビジネスにおける実践的な発表になりそう。

《補足コメント》

在学中はネイティブ中国スピーカーとのビジネス商談する際の中国語会話など語学習得が中心であったため、費用対効果や投資対効果、ROI の考え方は、入社後上司や先輩たちに教えてもらった。

実際にビジネス現場で使うお金の勉強は事前学習でやっておくと、より深まった内容のプレゼンテーションになると感じた。

以上、企業役の卒業生 OB よりコメントをもらい、共有フォルダ内でのコメントがあるとブラッシュアップされていることに気づいてもらえることがわかった。

また、今回の学習目標②の到達度に関しては、学生・企業双方とも身につけていることに差異はない。しかしながら、まだまだ市場調査による分析・考察という点では、エビデンスを持って示す証拠の裏付けや見解に対する理由説明という点では、まだまだ十分とはいえないことがわかった。

6. 研究の成果と今後の課題

6.1 研究の成果

本研究では、このような状況を改善するために、オープンソース LMS (Moodle4.1.2) と対面授業を組み合わせたブレンド型学習による日中間ビジネスで実際におこり得る課題をテーマにした PBL 型授業 (Project Based Learning) の設計を行い、学修成果の有用性の検証を行った。

3つの学習目標の到達度を測定するために、事前テスト・事後テストによる平均点を比較したところ、事前テストより事後テストの得点の方が有意に高いという結果を得ることができた。しかしながら、この事前テストと事後テストが本学習目標の到達度を測定するかどうか断定するにはまだ不十分である。少なくとも本研究で行った PBL 型授業において、学習者が協同学習を通して達成感を味わえたこと、本授業で掲げた3つの学習目標 (ゴール) を目指して、学習活動を行い実施前に比べ学習効果に何らかの影響を及ぼしたことは、明らかになった。

また、協同作業における認識については、長濱・安永・関田・甲原(2009)により開発された「共同作業認識尺度」を用いて定量的測定を行ったところ、「個人志向」因子と「互惠懸念」因子が授業の実施前と実施後で比較したところ、数値が低下し、「協同効用」因子に上昇がみられた。それが、学習目標3の到達度を問う事前・事後テストでの平均点の上昇との関連性が示唆される。

さらに、授業後実施アンケートとインタビューから、教師の課外活動におけるグループへの介入支援方策や学習デザインの改善によって、より効果的なブレンド型学習における PBL 型授業において、学習者にとってより良い協同作業を促す効果が期待できることがわかった。

何より、今回の研究で、学習目標3で示した異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫をしながらディスカッションを進めていくことが、有益であり、今後の就職活動や卒業後の企業で活かしていけると学生は感じており、協同学習においてみんな違う価値観のなかで課題解決をしていくための経験から得る深い学びを強く望んでいることが明らかになったと考えられる。

今後は、本研究で出てきた課題を改善し、授業実践を通して、共同作業に対する認識の変化を検証したい。

6.2 今後の課題

アンケート・インタビューにより、特に多かった意見が「時間がなかった」ということだ。もう少し時間があつたら、アンケート再調査できた、時間がない焦りから、チームで一緒に話し合い成果物の作業を進めたくても、自分で進めたほうが効率良いのではと思ってしまう場面があつたと答えていた。また、時間がないあまり、アンケート作成や資料作成に関し、チームによってもばらつきが見られ、うまくパワーバランスができていたチームは共有フォルダを作成し、成果物も協同編集を行なっていたが、もう1チームは、どうしてもPCを持っている学生だけが成果物作成をメインにやっけてしまいがちである。

今後は、授業でじっくり彼らが課題に取り組めるような内容に時間をまず見直す必要がある。これまで全5回で実施していたことを思い切って「キャリア指導Ⅱ」授業の取り組みとして初回(第1回目)からチームを組ませ、課題は最終ミッションとしてアナウンスしておくこと、第1回～第11回までも、決して本研究で扱った産学連携によるPBL型授業の内容は全く関連性がないわけではないわけではない。そのため、既存である「キャリア指導Ⅱ」全体の学習デザインから見直す必要である。

当初、グループ結成時に役割決めをしたが、チーム内週替わりで役割を輪番制の形にすることで、どの役割もチーム全員が経験できるのではないかと考えた。例えば、企業が閲覧できるようにGoogle共有フォルダを設定することはできているため、今後は全員が出来るだけ多くの作業の役割を経験できるように、以下の改善点を提案する。

1. Googleスライドにツールを限定し、協同編集を行える環境設定にする
2. スライドページのコメント機能で編集者の氏名を明記させる
3. 作成に関する話し合った内容の履歴を残すために「コメント」機能を活用してもらう
4. 初回のグループ結成時、Google共有フォルダ内に作業場設定と「共同編集」設定を学習活動に組み込む

以上の4点を改善した上で、授業実践を行うことを計画する。

また、今後の課題テーマ設定としてこれまでは日本から中国へ向けて発信することをテーマ設定していたが、グローバル人材の定義でもある日本人として日本の文化・を知るという意味では、日本進出を考えているもしくは日本ですでに進出している中華系企業が抱える課題に取り組むことも内なる国際化として再考してみることとする。

参考資料

以下の参考資料を添付する。

資料1:前提テスト

資料2:資料2:事前テスト(解答)/事後テスト(解答)

資料3:事後アンケート(学生)

資料4:事後アンケート(企業向け)

資料5:共同作業尺度

資料6:PREP 法・ホールパート法 チェックリスト(配布用)

資料7:振り返りシート(配布用)

資料8:授業投影資料(第1回)

資料1:前提テスト

前提テスト

※実技にてチェックを行う

Q1：目の前にいる方に、名刺交換後、中国語&日本語で自己紹介をしましょう。

チェック項目

語先後礼ができている。

「〇〇大学の△△△（フルネーム）と申します。どうぞよろしく願いたします」と日本語で言えている。

「您（你）好。我叫△△（フルネーム）。我是北京语言大学的学生。请多关照。」と中国語で言えている。

名刺を右手で差出し、左手で受け取っている

「〇〇さんですね。」と名前を確認している。

「頂戴いたします/收到您的名片」と言っている。

◆合格条件：☑リストの全てチェックがつくと合格

Q2：今から、wechat へ中国語でメッセージを送ります。何も見ないで5分以内にスマートフォンから中国語で返信してください。

送信メッセージ「你对中国商业感兴趣吗？（あなたは中国ビジネスに興味がありますか？）」

解答例）「是的。我很感兴趣」「我有点兴趣」「没有。不感兴趣」など

◆合格条件：「你对中国商业感兴趣吗？（あなたは中国ビジネスに興味がありますか？）」という問いに意思表示に基づき、返信できていれば合格

資料2:事前テスト(解答)/事後テスト(解答)

事前テスト

合格点:各学習目標 70%以上

学習目標1:大学で学んできた中国スキル(話す・読む・書く・聴く・文字入力)や国際情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる。
合格:21点以上/30点

Q1.中国で使用できないアンケートツールは何ですか?(計5点)

- 1 知っている→2点
- 2 知らない

「知っている」と答えた人のみ回答

Q1-1.中国で使用できないアンケートツールは何ですか?※翻訳アプリ不可 3点

Google フォーム

Q2 あなたは、中国本土に向けてアンケートを実施することになりました。次の問いに答えなさい。(計10点)

①どのアンケートツールを使いますか?※翻訳アプリ不可 2点

问卷星 Wechat

②アンケートツール内での質問項目を1問考え、中国語で記入してください。※翻訳アプリ不可 2点

中国語で記入があればOK

③ ②で書いた中国語を日本語で直しなさい。※翻訳アプリ不可 2点

②の翻訳ができていればOK

④あなたは、Q2②③の結果を日本語でグラフ化することができますか。→2点

- 1 できます
- 2 できません

「できます」と答えた人のみ回答

⑤「できます」と回答した場合、グラフデータを wechat で送ってください。→2点

画像が確認できればOK

Q3 日本企業が中国本土に向けてビジネス進出するうえで、重要なことは何ですか。正しいと思うものを全て答えなさい。(5点)

- 1 文化の違い
- 2 商習慣の違い
- 3 法律の違い
- 4 許認可の仕組み
- 5 価格の安さ
- 6 中国市場のどこに売られどのくらい売れているか
- 7 web アンケート
- 8 現地調査

5以外全てを回答して5点

Q4 日本企業が中国本土に向けてビジネス進出するうえで失敗事例を1つあげて説明しなさい。**※翻訳アプリ使用可**(10点)

失敗事例がかければOK

学習目標2:PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。【実技試験】

合格:21 点以上 /30 点

Q1 PREP 法を用いて、「大学時代に頑張ったこと」について3分以内で述べなさい。【実技試験】(計15点)

チェック項目	○
①PREP 法を使って、最初に「結論」から話している。(結論ファースト) 2点	
②PREP 法を使って、中盤に「なぜなら」と理由・根拠を述べている。2点	
③PREP 法を使って、「例えば・・・」など具体例を述べている。2点	
④PREP 法を使って、最後に「結論」を最初と同じ内容で「結論」を述べている。2点	
⑤聞き取りやすい大きな声で話している。	
⑥誰が聞いてもわかる言葉で話している。	
⑦話スピードが遅すぎない、速すぎず聞き取りやすいスピードである	
⑧聞き手を見ながら話している。2点	
⑨身振り・手振りを交えて話している。	
⑩顔の表情が豊かに話している。	

①②③④⑧が2点、その他1点

Q2 ホールパート法を用いて「私の趣味」について3分以内で述べなさい。(実技試験)15点

チェック項目	
①ホールパート法を使って、「□□についてお伝えしたい事が3点あります。1点目○○ 2点目△△ 3点目××です。」というように結論ファーストで全体像から話している。3点	
②ホールパート法を使って、「1点目についてですが～」 「2点目についてですが～」 「3点目についてですが～」と具体的な説明を中盤に順序だてて説明している。3点	
③ホールパート法を使って、最後に「以上、□□について3点お伝えしました。」と最初に話した内容をもう一度「結論・まとめ」として話している。3点	
④聞き取りやすい大きな声で話している。	
⑤誰が聞いてもわかる言葉で話している。	
⑥話すスピードが遅すぎない、速すぎず聞き取りやすいスピードである	
⑦聞き手を見ながら話している	
⑧身振り・手振りを交えて話している。	
⑨顔の表情が豊かに話している。	

①②③が3点、その他1点

学習目標3:異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。

合格:28ポイント以上 /40ポイント

あなたはこんな時、どうしますか？下の問いに答えなさい。**※翻訳アプリ使用可**

Q1 グループ内で話し合いをする予定でしたが、あなたはすでに予定があり欠席します。こんな時、あなたは どうしますか？5点

チェック項目	
授業やグループ内の話し合い時に遅刻や欠席した場合は、チーム内に連絡し、謝ることを当日中に行なえる。	

5点

Q2グループメンバーの一人から、グループ内にメッセージが届きました。あなたは どうしますか？5点

チェック項目	
チーム内で決めた「グラウンド・ルール」を守った。守らなかった場合は、改善点をチーム内に公表し、改善できる	

5点

Q3 グループ内でフリーライダー(フリーライダー)が出てしまいました。あなたはどうしますか？5点

チェック項目	
①チームメンバーが授業やグループ内の話し合い時に遅刻や欠席したり、チーム内で決めた「グランド・ルール」を守らなかったなど、チームに溶け込めないメンバーが出た時は、他のメンバーや教員に相談し、援助要請する事ができる。(2点)	
②チームメンバーが授業やグループ内の話し合い時に遅刻や欠席したり、チーム内で決めた「グランド・ルール」を守らなかったなど、チームに溶け込めないメンバーが出た時は、チームメンバーを尊重し、全体で協力して取り組めるよう雰囲気作りになるよう工夫できる。(2点)	
③自分からできることを探して行い、メンバーが補助を必要としているときはみんなで協力して作業を行えるような流れをつくる(1点)	

①②2点、 ③1点

Q4 グループでの話し合いでグループメンバーの意見に対し、あなたは反対したいと思いました。あなたはどうしますか？5点

チェック項目	YES
①いつも、全体の話し合いを進展させることを意識しながら話題やアイデアを提供し、建設的な話し合いに積極的に貢献できる(1点)	
②反対意見に対して、自分にはない視点を与えてくれたと肯定的に思う事ができる。(2点)	
③メンバーの発言に関連づけながら発言したり、質問するなど、メンバーの相互作用を生かして議論を深めることに貢献できる※翻訳アプリ不可 賛成時：「〇〇さんの発言はいいと思いました。なぜなら・・・」 反対時：「〇〇さんの発言もいいと思いましたが、私は別の意見として△△△もあると思いました。なぜなら・・・」と発言できた 質問時：「〇〇さんの発言に質問があります」(2点)	

①1点 ②③2点

Q5 グループ内で1人だけで頑張ってしまう人がいます。あなたはどうしますか。5点

チェック項目	YES
①いつも、全体的話し合いを進展させることを意識しながら話題やアイデアを提供し、建設的な話し合いに積極的に貢献できる	
②自分からできることを探して行い、メンバーが補助を必要としているときはみんなで協力して作業を行えるような流れをつくる	
③余裕あるスケジュールや役割分担を決め、全員が確認・管理できるような体制をつくり、問題があった場合も即座に対応する事ができる	

① 1点 ②③ 2点

Q6 グループを組んだ時に最初にグループ内で決めることは何ですか。2つ書いてみましょう。5点×2
役割分担・タイムスケジュール・グラントルールなど記入があればOK

Q7 これまでのグループワークで、あなたはチームで協力して課題達成目標を満たせるように働き、みんなで達成感を味わう経験をしてきましたか。5点

- 1 達成感を味わう経験をした
- 2 あまり達成感を味わえなかった
- 3 これまで達成感を味わったことがない

1の回答のみ5点

不合格の皆さんは、この授業を受けられます。

事後テスト

合格点:各学習目標 70%以上

合格点を達した人は、この授業の学習目標を達成となります。

学習目標1:大学で学んできた中国スキル(話す・読む・書く・聴く・文字入力)や国際情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる。

合格:21点以上/30点

Q1.中国で使用できないアンケートツールは何ですか？(計5点)

- 1 知っている →2点
- 2 知らない

「知っている」と答えた人のみ回答

Q1-1.中国で使用できないアンケートツールは何ですか？※翻訳アプリ不可 3点

Google フォーム

Q2 あなたは、中国本土に向けてアンケートを実施しました。次の問いに答えなさい。(10点)

①どのアンケートツールを使用しましたか？※翻訳アプリ使用不可 2点

问卷星 Wechat LINE など

②アンケートツール内での質問項目を1問、中国語で記入してください。※翻訳アプリ使用不可 2点

中国語で記入があれば OK

③ ②で書いた中国語を日本語で直しなさい。※翻訳アプリ使用不可 2点

②の翻訳ができていれば OK

④あなたは、Q2②③の結果を日本語でグラフ化することができますか。 2点

- 1 できます
- 2 できません

「できます」と答えた人のみ回答

⑤「できます」と回答した場合、今回の発表のグラフデータ作成時に工夫したことがあれば記入してください。 2点

工夫した内容の記述があれば OK

Q3 日本企業が中国本土に向けてビジネス進出するうえで、気を付けなければいけないことは何ですか。(5点)

文化や商習慣の違い、日本と中国の法律の違い、許認可の仕組み、中国市場のどこに売られどのくらい売れているかといった web アンケートや現地調査などの記述が1つでもあれば OK

Q4 日本企業が中国本土に向けてビジネス進出するうえで失敗事例を1つあげて説明しなさい。(翻訳アプリ使用可)10点

無印良品の判例など1つあげて説明できていれば OK

学習目標2:PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。【実技試験】

合格:21点以上 /30 点

Q1 PREP 法を用いて、今回のグループワークを通して「チーム内の MVP」について3分以内で述べなさい。(実技試験)15点

チェック項目	○
①PREP 法を使って、最初に「結論」から話している。(結論ファースト) 2点	
②PREP 法を使って、中盤に「なぜなら」と理由・根拠を述べている。2点	
③PREP 法を使って、「例えば・・・」など具体例を述べている。2点	
④PREP 法を使って、最後に「結論」を最初と同じ内容で「結論」を述べている。2点	
⑤聞き取りやすい大きな声で話している。	
⑥誰が聞いてもわかる言葉で話している。	
⑦話すスピードが遅すぎない、速すぎず聞き取りやすいスピードである	
⑧聞き手を見ながら話している。2点	
⑨身振り・手振りを交えて話している。	
⑩顔の表情が豊かに話している。	

①②③④⑧が2点、その他1点

Q2 ホールパート法を用いて今回のグループワークを通して、「自分が頑張ったこと」について3分以内で述べなさい。(実技試験)15点

チェック項目	
①ホールパート法を使って、「□□についてお伝えしたい事が3点あります。1点目○○ 2点目△△ 3点目××です。」というように結論ファーストで全体像から話している。3	
②ホールパート法を使って、「1点目についてですが～」 「2点目についてですが～」 「3点目についてですが～」と具体的な説明を中盤に順序だてて説明している。3	
③ホールパート法を使って、最後に「以上、□□について3点お伝えしました。」と最初に話した内容をもう一度「結論・まとめ」として話している。3	
④聞き取りやすい大きな声で話している。	
⑤誰が聞いてもわかる言葉で話している。	
⑥話すスピードが遅すぎない、速すぎず聞き取りやすいスピードである	
⑦聞き手を見ながら話している	

⑧身振り・手振りを交えて話している。	
⑨顔の表情が豊かに話している。	

①②③が3点、その他1点

学習目標 3:異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。

合格:28点以上 /40点

次回、あなたがもしグループワークを行う時、あなたはどのようにしますか？下の問いに答えなさい。(翻訳アプリ使用可)

Q1 グループ内で話し合いをする予定でしたが、あなたは寝坊して遅刻をしてしまいます。こんな時、あなたはどのようにしますか？5点

チェック項目	
授業やグループ内の話し合い時に遅刻や欠席した場合は、チーム内に連絡し、謝ることを当日中に行なえる。※1細分化	

Q2グループメンバーの一人から、グループ内にグループワークの提案に関して提案のメッセージが届きました。あなたはどのようにしますか？5点

チェック項目	
チーム内で決めた「グラウンド・ルール」を守った。守らなかった場合は、改善点をチーム内に公表し、改善できる	

Q3 グループ内でなかなか話し合いに参加せず、発言しない、チームの役割も果たさないフリーライダーのメンバーが1名いました。あなたはどのようにしますか？5点

チェック項目	
①チームメンバーが授業やグループ内の話し合い時に遅刻や欠席したり、チーム内で決めた「グランド・ルール」を守らなかったなど、チームに溶け込めないメンバーが出た時は、他のメンバーや教員に相談し、援助要請する事ができる。	
②チームメンバーが授業やグループ内の話し合い時に遅刻や欠席したり、チーム内で決めた「グランド・ルール」を守らなかったなど、チームに溶け込めないメンバーが出た時は、チームメンバーを尊重し、全体で協力して取り組めるよう雰囲気作りになるよう工夫できる。	
③自分からできることを探して行い、メンバーが補助を必要としているときはみんなで協力して作業を行えるような流れをつくる	

①②2点 ③1点

Q4 グループでの話し合いでグループメンバーの意見に対し、あなたは別のアイデアを思いつきました。あなたはどうしますか？5点

チェック項目	YES
①いつも、全体の話し合いを進展させることを意識しながら話題やアイデアを提供し、建設的な話し合いに積極的に貢献できる	
②反対意見に対して、自分にはない視点を与えてくれたと肯定的に思う事ができる。	
③メンバーの発言に関連づけながら発言したり、質問するなど、メンバーの相互作用を生かして議論を深めることに貢献できる 賛成時：「〇〇さんの発言はいいと思いました。なぜなら・・・」 反対時：「〇〇さんの発言もいいと思いましたが、私は別の意見として△△もあると思いました。なぜなら・・・」と発言できた 質問時：「〇〇さんの発言に質問があります」	

①1点 ②③2点

Q5 グループ内で1人だけで資料作りをやってしまっている人がいます。あなたはどうしますか。5点

チェック項目	YES
①いつも、全体の話し合いを進展させることを意識しながら話題やアイデアを提供し、建設的な話し合いに積極的に貢献できる	
②自分からできることを探して行い、メンバーが補助を必要としているときはみんなで協力して作業を行えるような流れをつくる	
③余裕あるスケジュールや役割分担を決め、全員が確認・管理できるような体制をつくり、問題があった場合も即座に対応する事ができる	

① 1点 ②③ 2点

Q6 グループワークを円滑に進めるために最初にグループ内で決めることは何だと思えますか。2つ書いてみましょう。5点×2

役割分担・タイムスケジュール・グラドルールなど記入があればOK

Q7 今回のグループワークで、あなたはチームで協力して課題達成目標を満たせるように働き、みんなで達成感を味わう経験をしてきましたか。5点

- 1 達成感を味わう経験をした
- 2 あまり達成感を味わえなかった
- 3 これまで達成感を味わったことがない

1の回答のみ5点

合格した皆さんは、この授業での目標を達成しました！！おめでとうございます。

【不合格者への対応について】

学習目標1:グループのメンバーへ今回のグループワーク時どうしたかをヒアリングしてもらい、再追試を行う。

学習目標2:LESSON2「効果的なプレゼンとは」のページ確認&練習後、再追試を行う

学習目標3:グループのメンバーへ今回のグループワーク時どうしたか、どういう工夫が必要だったか、質問(Q1～Q6)と同じ質問をヒアリングしてもらい、再追試を行う。

資料3:事後アンケート(学生)

授業実施後アンケート

※Google フォームでも回答してもらおう。

Q1.この授業についてあなたの印象を教えてください。

①この授業は面白かったですか?(注意:Attention)

4.大変面白かった 3.面白かった 2.少し退屈だった 1.大変退屈だった

②この授業はやりがい(=やってよかったと思うこと)を持っていましたか?(関連性:Relevance)

4.とてもやりがいがあった 3.やりがいを持てた 2.やりがいはあまりなかった

1.全くやりがいを持てなかった

③この授業に参加して自信を持っていましたか?(自信:Confidence)

4.かなり自信を持てた 3.自信を持てた 2.自信をあまり持てなかった

1.自信を全く持てなかった

④この授業に参加して良かったと思いますか(満足感:Satisfaction)

4.とても良かった 3.良かった 2.あまり良くなかった

1.全く良くなかった

Q2.本授業では、3つの学習目標がありました。あなたはどのくらい身についたと思いますか。

①「学習目標 1:大学で学んできた中国語スキル(話す・書く・聞く・文字入力)や中国情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる」

4.とても身についた 3.身についた 2.あまり身につけていない

1.全く身につけていない

②「学習目標 2:PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。」

4.とても身についた 3.身についた 2.あまり身につけていない

1.全く身につけていない

③「学習目標 3:異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。」

4.とても身についた 3.身についた 2.あまり身につけていない

1.全く身についていない

Q3 この授業を後輩たちへも勧めたいと思いますか。

- 4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない
1.全く思わない

Q4 この授業を受けて、あなたはもっと大学の授業科目を頑張って、社会で活かしたいと思いますか。

- 4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない
1.全く思わない

Q5 就職活動や卒業後働く上で、あなたは、大学で学んできた中国語スキル(話す・書く・聞く・文字入力)や中国情勢交えながら日本語と中国語を使って説明することを活かせると思いますか。

- 4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない
1.全く思わない

Q6 就職活動や卒業後働く上で、あなたは、PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明することを活かせると思いますか。

- 4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない
1.全く思わない

Q7 就職活動や卒業後働く上で、あなたは、異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫しながら課題解決していきたいと思いますか。

- 4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない
1.全く思わない

Q8-1 学生同士で、グループ内や授業ではクラス全員でディスカッションし合うことは有益でした(=役に立ちました)か？

- 4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない
1.全く思わない

Q8-2 どんな点が有益でした(=役に立ちました)か？

Q9 この授業で良かった点を教えてください。

Q10 この授業で分かりにくかった・難しかった点や改善点を教えてください。

ご協力いただき、ありがとうございます。

皆さんからの貴重なご意見を参考にして、次回以降の授業改善に役立てていきたいと思
います。

資料4:事後アンケート(企業向け)

授業実施後企業様アンケート

企業様向け 参加アンケート

本日は『北京語言大学東京校新ビジネス提案発表会』にご参加いただき、誠にありがとうございました。

お手数ですが、今後の本学グローバル人材育成授業改善研究のため、下記アンケートにご協力ください。

●調査目的と協力について

- ・本調査は、PBL 型授業に関するお気持ちを調査することを目的としています。調査の結果は、今後のグローバル人材育成授業改善のための研究に役立てられます。
- ・本調査は、選択式の質問と記述式の質問で構成されています。
- ・下記の項目をよくお読みいただき、ご理解、ご承諾の上、調査にご協力くださいますよう、よろしく願いたします。

●調査協力に関して

- ・本研究は皆さまの自由意思を尊重しています。研究にご理解いただいた上で、ご協力ください。
- ・本調査の回答の所要時間は、5分程度です。
- ・調査に参加しなくても、また調査を途中でやめても、不利益を被ることはありません。
- ・調査にご協力いただける方は、はじめの質問で「同意します」を選択してください。
- ・お答えになりたくない質問には、無理に回答いただく必要はありません。回答を中断することも可能です。

●個人情報保護に関して

データは回答 ID で管理し、公表の際にはとりまとめて統計的に処理しますので、個人情報が外部にもれることは一切ありません。結果は責任者が厳重に管理し研究以外の目的に使うことはありません。

アンケート調査に関するお問合せ

北京語言大学東京校 キャリアセンター 濱崎あゆみ

Mail: a-hamasaki@isi-global.com

連絡先: 070-8333-7103

同意します

同意しません

Q1 今回の学生たちの発表に対する満足度をお答えください

4.大変良かった 3.良かった 2.あまり良くなかった 1.全然良くなかった

Q2 今回の発表テーマは、現実的にビジネス現場で起こり得るテーマの内容でしたか？

4.とても現実的に起こり得る 3.起こり得ることもある 2.あまり起こり得ない

1.全く現実的ではない

Q3 今回の発表テーマの難易度はいかがでしたか？

4.最適であった 3.難しい 2.簡単 1.どちらでもない

Q4 本授業では、3つの学習目標がありました。これらの到達度に関して印象を教えてください。

①「学習目標 1:大学で学んできた中国語スキル(話す・書く・聞く・文字入力)や中国情勢を交えながら日本語と中国語を使って説明することができる」

4.とても身についている 3.身についている 2.あまり身についていない

1.全く身についていない

②「学習目標 2:PREP 法やホールパート法を用いて、相手に理由や根拠を添えて相手に分かりやすく説明する事ができる。」

4.とても身についている 3.身についている 2.あまり身についていない

1.全く身についていない

③「学習目標 3:異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。」

4.とても身についている 3.身についている 2.あまり身についていない

1.全く身についていない

Q5 このような産学連携授業の取り組みを次回以降も継続したいと思いますか。

4.とても思う 3.思う 2.あまり思わない 1.全く思わない

Q6 今回の取り組みにおいて本学学生の印象を教えてください。

Q7 この発表の良かった点を教えてください。

Q8 この発表の改善点を教えてください。

ご協力いただき、ありがとうございます。

皆さんからの貴重なご意見を参考にして、次回以降の授業改善に役立てていきたいと思いをます。

資料5:共同作業尺度

協同作業認識尺度

以下の項目は、協同作業に対する、あるいはグループで一緒に仕事をするに関する意見や感想です。各項目に関してあなたはどの程度同意できますか。

		全く そう 思わ ない	どち らか とい え ば 思 わ ない	どち ら とも い え ない	どち ら か とい え ば 思 う	と と も そ う 思 う
1.1	みんなで一緒に作業すると、自分の思うようにできない	1	2	3	4	5
1.2	グループのために自分の力（才能や技能）を使うことは楽しい	1	2	3	4	5
1.3	一人でやるよりも協同したほうが良い成果を得られる	1	2	3	4	5
1.4	グループでやると必ず手抜きをする人がある。	1	2	3	4	5
1.5	周りに気遣いをしながらやるより一人でやる方がやりがいがある	1	2	3	4	5
1.6	協同はチームメートへの信頼が基本だ	1	2	3	4	5
1.7	みんなで色々な意見を出し合うことは有益である	1	2	3	4	5
1.8	能力が高くない人たちでも団結すればよい成果を出せる	1	2	3	4	5
1.9	みんなで話し合っていると時間がかかる	1	2	3	4	5
1.10	グループ活動ならば、他の人の意見を聞くことができるので自分の知識も増える	1	2	3	4	5
1.11	人に指図されて仕事はしたくない	1	2	3	4	5
1.12	優秀な人たちがわざわざ協同する必要はない	1	2	3	4	5
1.13	失敗した時に連帯責任を問われるくらいなら、一人でやる方がよい。	1	2	3	4	5
1.14	協同は仕事のできない人たちのためにある	1	2	3	4	5
1.15	個性は多様な人間関係の中で磨かれていく	1	2	3	4	5
1.16	協同することで、優秀な人はより優秀な成績を得ることができる	1	2	3	4	5
1.17	たくさんの仕事でも、みんなと一緒にやれば出来る気がする	1	2	3	4	5
1.18	弱いものは群れて助け合うが、強いものはその必要はない。	1	2	3	4	5

資料6:PREP 法・ホールパート法 チェックリスト(配布用)

PREP 法チェックリスト

チェック項目	○
①PREP 法を使って、最初に「結論」から話している。(結論ファースト) 2	
②PREP 法を使って、中盤に「なぜなら」と理由・根拠を述べている。 2	
③PREP 法を使って、「例えば・・・」など具体例を述べている。 2	
④PREP 法を使って、最後に「結論」を最初と同じ内容で「結論」を述べている。 2	
⑤聞き取りやすい大きな声で話している。	
⑥誰が聞いてもわかる言葉で話している。	
⑦話すスピードが遅すぎない、速すぎず聞き取りやすいスピードである	
⑧聞き手を見ながら話している。 2	
⑨身振り・手振りを交えて話している。	
⑩顔の表情が豊かに話している。	

◆ホールパート法チェックリスト

チェック項目	
①ホールパート法を使って、「□□についてお伝えしたい事が3点あります。1点目○○ 2点目△△ 3点目××です。」というように結論ファーストで全体像から話している。 3	
②ホールパート法を使って、「1点目についてですが～」 「2点目についてですが～」 「3点目についてですが～」と具体的な説明を中盤に順序だてて説明している。 3	
③ホールパート法を使って、最後に「以上、□□について3点お伝えしました。」と最初に話した内容をもう一度「結論・まとめ」として話している。 3	
④聞き取りやすい大きな声で話している。	
⑤誰が聞いてもわかる言葉で話している。	
⑥話すスピードが遅すぎない、速すぎず聞き取りやすいスピードである	
⑦聞き手を見ながら話している	
⑧身振り・手振りを交えて話している。	
⑨顔の表情が豊かに話している。	

資料 7:振り返りシート(配布用)

◎振り返りシート

評価日： / /

チーム名：

名前：

チームメンバー：

～グラドルール～ 合意事項		＜評価＞	
		自己評価	他者評価
1			
2			
3			
4			
5			

※もし、チームのどれかが私たちのグラドルールを1つ以上破った場合（守らなかった場合）は、チームでミーティングを行い、その人に対して、グラドルールを守るように要求することがあります。それでも、そのひとがグラドルールを守らなかった場合は、教員へ援助要請し、解決策を一緒に考えてもらうように相談をお願いします。

今週私のチーム貢献度は（ ）%です。
◆貢献したこと

（評価者名： ）より一言コメント！

自己評価・他者評価を受けて、来週チャレンジしたいこと

キャリア指導Ⅱ

前提テスト

◆前提テスト ※実技にてチェック

□初対面の方に、語先後礼のお辞儀、名刺交換をし、中国語と日本語で自己紹介ができる。

□中国語でSNS上でメッセージを送る事ができる。

合格条件:
2つのテストでこの授業を受けられます。



今日の目標

1. 学習目標の確認
2. スケジュール
3. はじめに
4. グループワーク

1学習目標の確認

- ◆学習目標1
大学で学んできた中国語のスキル(話す・書く・聞く)や中国情勢を事例を使って説明できる
- ◆学習目標2
PREP法やホールパート法を使って、相手に説明する事ができる。
- ◆学習目標3
異なる文化背景を持つ者同士で協同学習を上手く進めるための工夫ができる。



2スケジュール

日	内容	必須課題(4チーム ◆個人)	評価
1	ミッション確認・グループ組成 情報集約・ニーズ分析とは	★チーム結成シート・グランドルールの提出 (Moodle/LESSON10【課題1】) ◆商品のアイデア出し (Moodle/LESSON10【課題2】)	
2	ビジネスプランの立て方 効果的なプレゼンとは	★ニーズ分析調査方法 (Moodle/LESSON11【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON11【課題2】)	・振り返りシート(10点)
3	中国ビジネス展開する上で気をつけたい コピー・商印商品の判決事例から考える。	★提案書(仮)PPT (Moodle/LESSON12【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON12【課題2】)	・振り返りシート(10点)
4	プレゼンテーションリハーサル	★提案書(本番)PPT (Moodle/LESSON13【課題1】) ◆振り返りシート (Moodle/LESSON13【課題2】)	・振り返りシート(10点)
5	プレゼンテーション発表 (期末試験)※企業の方からFB	★リアクション(振り返りシート) (Moodle/LESSON14【課題1】)	・事後テスト(50点) ・リフレクションシート(20点)

3.はじめに

《カバーストーリー》

あなたは、BLCUコンサルティング株式会社の社員です。BLCUコンサルティングでは、中国をはじめとするアジア、ASEAN諸国へ日本企業の海外ビジネス進出をサポートする専門コンサルティング会社です。
北京語言大学東京校で中国語や中国文化・情勢について勉強したあなたは、入社2年目となり、4人～5人のさまざまな文化背景を持つ国籍の異なるメンバーで、チーム結成し、クライアントへ新ビジネスの提案ができる機会をもらえることになりました。

3.はじめに



**中国本土の若者に向けて、これから中国で流行りそうな商品・サービスを新ビジネスとして展開していきたい。
新ビジネスの提案をしてほしい。**

株式会社 Flask

① 中国本土のトレンド・ニーズに合致する商品であること。
② 中国本土での地域からビジネス展開をスタートしていくかを示すこと。
③ 日本と中国の法律に違法にならないこと。

3.はじめに

- 《「提案書」の構成》
- ① 導入: 相手が興味を引く問いかけをする
 - ② 提案1: 提案の概要
 - ③ 提案2: 提案には、どのようなメリットがあるかを伝える
 - ④ 詳細: 提案の詳しい説明をする。
 - ⑤ 根拠: データ・グラフを用いて数字を使い、相手を納得させる。(思いつきではないこと)
 - ⑥ まとめ: これまでの内容のまとめ

【グループワーク】

チーム内『グランドルール』と役割分担を決めよう



【課題】

課題1:
チーム代表者がMoodle内で提出(チーム課題)
・チーム結成シート ※今後振り返りに使います

課題2:
・商品、サービスのアイデア出し(個人課題)

※くわしい説明はMoodle内で確認しましょう。

〆切: 月 日 () 22:00まで

参考文献

- ・総務省(2017)グローバル人材育成の推進に関する政策評価書(要旨)
https://www.soumu.go.jp/main_content/000496469.pdf(参照日 2023.12.2)
- ・尾崎剛・広瀬啓雄・市川博・山本芳人「社会人基礎力の修得を目的とした課題実践型 PBL 授業の継続的改善策の提案」,日本教育工学会論文誌,No.42(3),PP243-253(2018)
- ・宮木一平(2018)「課題解決型産学連携授業の設計と実施—学生の学習と教育効果—」杉野服飾大学短期大学部紀要,No.17,PP16-23
- ・三重大学高等教育創造開発センター(2007)「三重大学版 PBL 実践マニュアル—事例シナリオを用いた PBL の実践—」
- ・新村出編(2008)広辞苑,第6版,岩波書店
- ・関田一彦・安永悟(2005)「協同学習の定義と関連用語の整理」日本協同教育学会『協同と教育』第1号,PP10-19
- ・鈴木克明(2015)『研修設計マニュアル—人材育成のためのインストラクショナルデザイン—』北大路書房
- ・スージー・ボス,ジョン・ラーマー,訳者池田匡史,吉田新一郎(2021)『プロジェクト学習とは地域や世界につながる教室』新評論
- ・鈴木克明,美馬のゆり編著,『学習設計マニュアル—「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン』北大路書房(2002)
- ・鈴木克明(2002)『教材設計マニュアル—独学を支援するために』北大路書房
- ・市川尚,根本淳子(編著),鈴木克明(監修)(2016)『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北大路書房
- ・長谷川由香(2019)「プレゼンテーション評価におけるルーブリックの導入報告」,アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル Vol1,PP110-18
- ・坂田浩・前田有香(2005)「異文化発達質問紙(IDI)を用いた多様性トレーニング効果の検証」,徳島大学留学センター紀要 No. 1, PP11-18
- ・山本志都・丹野大(2002)「異文化感受性発達尺度(The Intercultural Development Inventory)の日本人に対する適用性の検討:日本語版作成を視野に入れて」,青森公立大学紀要』No.7,Vol2, PP24-42

- ・天木勇樹, 東本裕子, 白須洋子(2023)「国際的志向性が低い学生の異文化感受性の変化の検証—異文化感受性発達度アンケートからの考察—」, 大正大學研究紀要 108 輯, PP 323-354.
- ・福井愛美(2016)「ルーブリックを用いて大学生のプレゼンテーションを評価する際に考慮すべきこと」, 神戸女子短期大学論攷, 61 卷, PP43-50
- ・長濱文与, 安永悟, 関田一彦, 甲原定房 (2009)「協同作業認識尺度の開発」, 教育心理学研究, 57(1), PP24-37

謝辞

本研究に取り組むにあたり、ご指導いただいた熊本大学大学院教授システム学専攻の喜多敏博先生、合田美子先生に深く感謝申し上げます。

特に主指導教員としてご指導いただいた喜多敏博先生には、研究計画の段階から定期的に実施されたオンラインや対面などでお時間をいただき、毎回熱心なご指導をいただきました。常に気持ちに寄り添ったフィードバックをいただきながら、研究への後押しをいただきながらご指導いただけたこと、深く感謝申し上げます。喜多先生から、修士研究だけでなく、今後研究者としての道標や研究に対する面白さを教えていただきました。

また、副指導としてご指導いただいた合田先生からは、研究の重要な分岐点でその都度 PBL 型授業を実施する魅力や今後の研究に向けた決して学生を裏切らない熱意ある思いでご指導いただき、研究の途中通過点であった学会発表や中間報告などでも研究を進めるためのヒントをいただきながら、より良い改善に繋げることができました。合田先生からのアドバイスは、今後も学生指導を行う上で自身の目指すべき教員像ともなりました。

その他、熊本大学大学院教授システム学専攻の先生方には、オフィスアワーや合宿時では、研究に関する貴重なアドバイスをいただき、さらに、学会前の練習会や合宿においては、同窓生の先輩方から研究に関するアドバイスを自分ごとのように熱心なアドバイスをいただき、励ましていただきました。

この謝辞をもって、熊本大学大学院教授システム学専攻の先生方と同窓生の皆様へ感謝申し上げたいと存じます。

また、本研究を進めるにあたり設計した教材に関する専門家レビューをいただいた同窓生の方、実務家レビューをいただいた同グループ校のキャリアセンター長の高木良幸先生、米村真織先生、Moodle 開発にサポートいただいた実践校の小池惣先生、企業として協力いただいた(株)クララオンライン様にも心より感謝申し上げます。

さらに、本研究の形成的評価のためのデモ授業を最後まで面倒くさがらず、自分のためにも有益であるので参加したいと申し出てくれた実践校学生の皆さんや OB 卒業生の矢後英一さんには、大変感謝しております。彼らの理解と信頼、協力あつての研究であったため、限られた時間であったにもかかわらず、笑顔でいつも前向きに意欲的に取り組んでくれる姿勢にいつも鼓舞された中で研究を実現できたことに感謝して

おります。学生達から多くの教えをもらい、授業は、「学習者中心主義」でなければいけないことに改めて、本研究に協力いただいた学生達から学ばせてもらいました。

そして、2年間共にお互い研究が思うようにうまく進まなかった時に励ましてくれた同級生の皆さんは共に切磋琢磨しあい、研究を進めるにあたり苦しむ私へ勇気と励ましの言葉をいただきながら、日々学習を通してたくさん与えてくれた同級生の皆さんへ深く感謝いたします。皆さんとの出会いは、私にとってかけがえのない財産であり、これからも各々が新たな道へと進みますが、共に向き合い励まし合ってきた良き仲間として、ご縁が続いていけるよう今後ともよろしく願いいたします。

最後に、入学前の科目履修時の時から日々の学習を進める上でサポートしてくれた家族親戚一同にも感謝し、本論文の謝辞といたします。